

川柳塔

昭和四十五年三月二十五日 印刷
昭和四十五年四月一日発行 (毎月一日発行)
(第五十五号)



No. 55

二賞中間発表

四月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本 盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る



13日の金曜日

2月13日は今年初めての13日で金曜日、欧米風に気にする仁も多い日。新宿駅から千葉を経て総武線の八日市場に向った。百三才の川柳ばあさんを訪ねるためである。2年前NHKから川柳をすすめる挨拶の中にこのばあさんの話を紹介した手前、是非会いたいと願っていたからである。広い八日市場のどの辺に住まっているか全く不案内だったが、まよ大胆、駅に降りた。ちょうど一緒に下車した女子高生に尋ねると即座に道順を教えて呉れた。一寸げん顔なばあさんに来意を告げ

ると先月痛めた不自由な足をずらしながらお茶だお菓子だと10年の知己の暖かさ。「老後をたのしく」で聞いている放送の声とほんに同じだわネと一層親しそうな顔になる。案内して下さった鈴木という理髪屋さんは長年当地で川柳をやって居られてそのすすめで90才近くになってから川柳を始めたそうで川柳一筋に生きぬく明朗さはいつまでも名ごりがつきぬ。私にとっては洵にラッキーな13日の金曜日であった。

天寿全うしてやれやれ死にやはった

立礼は首実検の姿にて

その日ふと犬吠埼の波は風ぎ

拝むのはそこそこ百円の守り札

百三才の女を訪う

やぼったい長寿法など聞かずおき



川柳ばあさんと生々庵主幹

中島生々庵

川柳塔四月号

座右の句

ふるくとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

凡人へもつたいたなくも湯があふれ

浜田 久米雄

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

13日の金曜日一句帖

中島生々庵 (1)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

ぼろいこと

傍島静馬 (2)

川柳初篇研究 (八十二)

(20)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄

川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫

アムール・バルチザン (大陸巷談)

東野大八 (22)

近作柳樽

北川春巢選 (30)

秀句鑑賞

(同人吟)
(近作柳樽)

西尾 栞 (28)

川村好郎 (29)

九輪抄

清水白柳選 (39)

ぼろいこと

傍島 静馬

「なんぞぼろいことおまへんか」

「なに云うてなはんね、あんたこそこつそりぼろいことしてなはんのやろ」

こんな会話を日常よく耳にするが、ぼろいとは一体どんなことなのだろうか。

南米あたりのまだ見たこともない伯父とやらから莫大な遺産が転げ込んで来た。全く夢のようなぼろい話だがこれは可能性のないナンセンスだ。また後にも先きにもたった一枚だけ買った宝クジに当選賞金一千万円貰った。これもぼろいがこんな幸運に恵まれることは恐らく無いだろう。

法網をくぐりこわい思いをして密輸または脱税などで悪銭を身につけても年中怯えていなければならぬし、また投機やギャンブルで一時的に大金を儲けたとしても、いずれは元の木阿弥になるのが落ちだろうし、これ

川柳徳川記……(十三)……………富士野鞍馬……(26)

二賞中間発表……………(24)

近詠……………諸家……………(41)

梅志さんさようなら……………中尾藻介……………(42)

藤本礎山氏を悼む……………奥谷弘朗……………(43)

礎山最後の日記……………藤本佳女……………(45)

初歩教室……………本田恵二朗……………(50)

第十七回大萬川柳大会……………(44)

大萬川柳「モデル」……………清水白柳選……………(50)

柳界展望……………(薰風)……………(52)

本社三月句会……………(庸佑)……………(54)

各地柳壇……………(文秋)……………(58)

「失敗」……………白井三林坊選……………(46)

「長男」……………浅野芳朗選……………(46)

一路集……………「ゴルフ」……………(46)

「長男」……………太田良子選……………(47)

座右の句……………(路郎)……………(46)

俺に似よ 俺に似るなと子を思い……………(46)

私の句……………家計簿をきっちりつけてめめとらず……………(46)

吉田圭井堂

ではばろいと云えたものではない。

こんなこと以外に若しほんとうにばろいことがあったとしたら、他人に洩らすより先にこっそり自分のものにしてしまおうだろう。

こうしてみると世の中にほんとうにばろいということは先ず無いのではなからうか、若し仮にあったとしても、それは他人が教えてくれるものではなく、自分で探し自分がかち取らなければならないもののように思われる。

ではどうすればよいか！それは働くことである。ただ漫然とではなく頭と軀をフルに働かせ、常に時流に遅れぬ細心の配慮と挫けぬファイトを持つてすること、こうした努力の積重ねが時に貴重なヒントを見出し斬新なアイディアを生み出す。これらをうまく活用することにより思わぬ喜びと大きな報酬を勝ち取ることが出来る、これだと思ふ。

結局はこうして懸命に働く努力の中に「ばろいこと」が、潜んでいるのではないだろうか、漫然と腕を拱ね当てにならない機倅を待つより、男一っぴき仕事に生命を賭けて「ぼろ口」の一つでも発掘しようではないか。

「私の趣味は仕事と大きく出」



中島生々庵選

京都府 大鶴喜由

庭ぼうき顎に越し方行く末を

あごの髭白ければこそ今朝も剃る

遊ぶために儲けるもよし男なら

下着まで相談しあう中になり

反戦をエサに若人引きずられ

大阪市 橘高薫風

妻に病まれ壺中をのぞく日に幾度

病妻は少女のようなくくり髪

手にのせた文鳥の暖 母が病む

老猿の半跏思惟像すぐ崩れ

一隅というは安けし猫などいて

堺市 吉田圭井堂

功なつてバイトに書かず立志伝

非常識とわらった型がはやり出し

公害を連れ子に企業お興入れ

吠えぬよう育てておいてばやいてる

黠八で猫も杓子も片づける

青森市 工藤甲吉

きさらぎの風をまともに貧乏し

風雪の朝を定年励まされ

大臣の名を知っていてはめられる

安保条約孫があるので迷わされ

変貌をするふるさとへうとくなり

大阪市 正本水客

襖絵の由緒へ冬陽とどかずに

ケタの違う話へ妻のさり気なし

地に落ちることを知らない星に似て

生活が掛かるとはおこがまし
かぶと虫にも要領のいいのと悪いのと

岡山県 浜田久米雄

新聞が来て郵便が来て誰も来ず
はじめての鍼へ神経痛あわて

刺身だけたべてきれいな膳を辞し

来年のことへ鬼など考えず

古稀までに咲くさ さくらの苗を植え

倉敷市 本田恵二郎

五歩六歩詮なき車窓追いかける

沈丁花の移り香に酔う枝の雪

知能指数伸びる背丈に追いつけず

誓うではなかった特級酒が届き

長寿番附が女性上位を証拠だて

島根県 堀江正朗

見えている人は日の出だ日の入りだ

思うこと少し枕の位置を変え

妻の留守地球は停止したごとし

事あれば五尺五寸の荷物なり

見えぬから耐えねばならぬ手が震え

芦屋市 丸川初甫

ワンマンは先手先手が気に入らず
グループの一つ一つにボスが居り
日旺の昼はうどんのマイホーム
若松を活けてアパートの置き所
副作用ない能書でたんと飲み

高槻市 傍島静馬

万博にこじつけみたいな身内来る

顔を見て泣く病人を見舞いかね

スラム街天使気取りで見てもわり

北風が睡眠不足吹き飛ばし

給料日まえばきっちり家で喰べ

大阪市 金井文秋

妻病む

妻に先き臥られて風邪も引けぬ日々

付添うてやりたし店は閉められず

食べられぬ身にお見舞いをまた積まれ

無神論何に祈る煙草断ち

雑食に慣れてしもうた妻の留守

大阪市 本多柳志

ちっぽけな見栄が小銭を出ししがり

粗品貰いに来た大丸でおじぎされ

信仰とは別 仏像の美しさ

押し入れもくらしの恥部はかくされず

悼 梅志

憶い出のカードへつきぬ住所録

豊中市 戸田古方

開場前夜「万博」(五句)

どのへんにどない表現する調和

ハンガリアン・ダンスのままで伊勢音頭

大阪弁塔の上から舞いおりる

日本の庭の不思議に去りかねる

屋根瓦までお国から運ばせる

東大阪市 久米奈良子

漬け菜干す仕種病母に見守られ

千代結び愛さりげなく潜り抜け

底辺に育てし恋も陽へしほみ

かがり火を胸のどこかに女生き

石一つ沈思黙考雨に濡れ

米子市 八木千代

働いて来た手ししみ火にかざす

影もまた深い光りと気が付かず

同性として恋知った娘が不びん

気まぐれの易を信じて運を待ち

何度でも占ううちに吉と出た

熊本県 有働芳仙

握手してくれた候補が落選し

黙々と大志は金を蓄めつづけ

慰謝料が払えぬばかりの腐れ縁

アイシャドウ眼科非情にめくり上げ

富田林市 岩田美代

双方に花を持たせる花がない

一言を詫げるにこうもひまがいり

ようやくと且の心へ陽が届き

ふり向いてししみ心の負けを知る

伊丹市 小川静観堂

この義歯で俺の一生幕引こか

旧部下看護婦達の写真

旧姓ズラリ花の便りは姥ざくら

すき焼ののこりで結構朝うまし

白骨になれば俺もさっぱりするやろう

大阪市 西出一栄

シクラメン赤を並べて嫁若し

なつかしのメロディー嬉しりバイバル

汗拭いて拭いてカレーを食べ終り
言い度いこと明日に延ばしてまかれとく

神戸市 仲 どんたく

赤ベレーまだやったるぞの顔で撮り

火の用心さっしやりましよう今日も晴

W氏逝く

眉長き人香煙の中に笑み

ぼろ服に着替えて乞食営業す

桜井市 岩 本雀踊子

みちたりた暮し僕の金妻の金

人生の道草不孝者と云う

甘からの人生なめた座りだこ

ここまでの話は他人にかりた知恵

広島県 高 橋 鬼 焼

口笛も歩巾も酔うて一人ぼち

夜の雪こっそり庭を白くする

家計簿の不満せめてもミシン踏む

おとなりへもらしてならぬうわさ聞く

宇部市 平 田 実 男

ハネムーンなのに美人へ目が移り

今はもう思い出ばかりの骨拾う

思い出の軍歌それから酔えぬ酒
分譲地手近かな駅が見当らず

倉敷市 小 野 克 枝

めぐり合い心の傷が痛み出し

声援を感謝しながら振り向かず

いつからか人間憎み孤立する

墓標の人と二人っきりのお喋り

平田市 久 家 代 仕 男

薄着には馴れて長屋に風と住む

田楽を賞めて炬燵の雪見酒

池田候墓地にて

墓碑あわれ雪に埋れてあげ羽蝶

公立の歯止め私に私立すすめられ

下関市 桜 川 不 水

平鍛のいくらか錆びて寒が明け

出ようかなまだ早いかなチューリップ

さもしさを涙で諭す暮らしむき

好みまで一緒夕餉の灯がたのし

岡山県 浜 野 奇 童

言い訳に窮し先生怒り出し

別府地獄にて

吹きあげる湯煙誰の怒りかや

阿蘇山にて

火口静かたといえ地獄は怒るとも

長崎にて

蝶々も詩人こんな所で人を待ち

大阪市 宮尾 あいき

指切りのからむ指まで燃えている
じゃれて来る小犬お前も淋しいか
朝の慈雨夜通し降って嫌われる
旅無情ホーム違いを教えられ

出雲市 尼 緑之助

事故公害社会の隙間風が吹く
性格をはっきり見せて基石並ぶ
夢多き人生なりき煙管持つ

〇君新築

夢や又拙げん木の香新しく

八尾市 高杉 鬼遊

札束で張られたのはがはてる夜
また一人寡疎を離れるバスが揺れ
ほんとうは歩であり金の貌をする
蜘蛛の巣へ蠅一生の不覚です

笠岡市 木山 遠二

生甲斐を飲み食いだけにして気楽
年金は死ぬのが惜しいほど呉れず
露のとう陽気の方が遅れがち
ふところへ入れると出刃は怖いもの

出雲市 王 紫

押して駄目引いても駄目で策を捨て
酷評の本心を汲む愛の鞭
愚痴云えど飢えぬ程には与えられ
邪念去る時浄らかな愛の再燃

京都市 都 倉求芽

一日ぐらい蝶をだますな冬の陽よ
商人の暦は止まったりとばしたり
食べ物の夢みて病人はげまされ
易てもろたことも病人知っていた

大阪市 山川 阿茶

孤独には孤独のよさに感謝する
満更の阿呆じゃないとはうぬばれか
五六ペン仮縫しても六等身
前衛の根べを先に入れる花

岡山市 川端 柳子

内裏様遠出したから春の風
L寸を採せばLL寸もあり
貯えと寿命差引する苦心

倅わせの矢印ならばためらわず

竹原市 森井菁居

身の程を知ってガベラ冬を寝る
去年とは違うところにダリヤの芽
かがり火へ鮎は自滅の道選ぶ
青磁との対話へ酔いがはばかられ

竹原市 小島蘭幸

風が去り嵐が去ってもとの顔
用件がなければ逢えぬ人となり
笑わない娘がひとりテレビを見ていない
物足らぬ一日だったけど眠る

岸和田市 葛城伊三郎

人氣なき深夜なれども青を待ち
茶柱の縁起を社迄持つて行き
聞き合わせ我が家のボロは棚に上げ
競輪の果てやけくその顔ばかり

藤井寺市 西いわを

正月が済んだ矢先へ雛祭り

つかかけを履いて出たらし近所らし
冷たいと云えるも女房なればこそ
時ならぬヒヨ鳥の声道化者

松原市 谷垣史好

影二つ別れ話に見えるかい
嗜めば蜜したたりそうな耳たぶよ
できすぎた女へうちあけかねる恋
探しさがしてもとの十字路

高槻市 若柳潮花

足拍子一と問はずれたツボあわせ
糸切れたまま三味線に手もふれず
心底は憎めぬひとをさけつつけ
生涯を目なしダルマのままで生き

大阪市 福井野迷路

目を読んで目で語る術未だ未熟
釣糸殺生の目と食い気の目
公害屋物価屋安保屋沖縄屋
三億はおろか五億の生け花屋

大阪市 児島与呂志

勝浦・那智の滝

水の面にもう春がある白ヶ浜

降り立ちて南紀の空気うまく吸い
春一番岩の間合いくぐり抜け
島めぐる汽船湯舟の露天なり

出雲市 弘津柳慶

情報を信じて株へ大損し
馬面をうまく生かして三枚目
空っぱの冷蔵庫よ妻入院
妻の留守娘の小言に素直なり

倉敷市 小幡里風

この部屋の派閥知ってる廻り椅子
逃避した二人が島の色に染み
友情をこぼしたとこヘドラが鳴る
萎れる事知らず造花の二階借り

大阪市 市場没食子

モシモシと呼ばれ定期を見直され
辞める気の潜在休む日がつづく
求人広告二三ひやかし来たばかり

初詣

なんべんも孫賽銭を入れたがり

京都市 松川杜的

女並サイズを女に笑われる

実兄死す行年五十六才(二句)
縋りつく顔に体温未だ温くし

斗病七年こうもきれいな顔で死に
定退の思案ゆっくり置炬燵

大阪市 今西章雅

老母危篤

卒中昏すい電話の受話器耳をさす
おしゃべりは無用のベッドへ涙声
鼻からのゴム管曾孫の目に不気味
枕頭のだんまり後遺症案じ

門真市 福島鉄児

言うだけは云ってもやもやだけ残り
泣きじゃくりいつか寝息を立てている
愛の鞭などと勝手な理屈つけ
逢いに行く顔を鏡が笑いそう

倉敷市 水粉千翁

真実に触れぬ覚悟という笑い
いさぎよいさだめを蕾から匂い
倅せを野に咲く花の陽に萎れ
横道へ寡婦は外れたい日を語り

大阪市 木村水洞

肩書を持たぬ名刺は待たされる
金貯めた頃には物価またあがり
風邪ひかぬように長屋の子は育ち

外孫

また一つ苦勞がふえる孫生れ

倉敷市

野田素身郎

気まぐれな妻三味線を張替える

損得を考えすぎて立後れ

間合わせ俺によく似た過去をもち

噂ではいい線いっていた異動

奈良市

宮口笛生

足もとをみられたくやしき服を買う

馬鹿だった昨夜の酒がまだ残り

寒い寒い云うている間に梅の花

山陰の旅

山陰の土産は高い蟹を持ち

大阪市

酒田清子

姉（二栄）再入院

聴診器へ外出許可を言いそびれ

調子よい日は主治医もご気嫌なり

愚痴になる過去はふり返るまい

満四ツゴマ摺ることをもう覚え

下関市

国弘半休門

良くできた孫でチョッピリ嫁をほめ

孫が寝て子が寝て老妻茶をたてる

孫ませて長女の婿の三回忌

万博は観たい見せたい孫の知恵

堺市

高橋千万里

鉄筋の部屋カレンダー又すべり

来るはずの電話一升瓶がまち

ピンチ逃げうまく歯車合わす人

つけまつ毛弱気を見せぬ顔にする

奈良県

石倉旅風

退院と決まればもっと居たくなり（旧暦三十日）

浮子睨みすぎて魚が寄りつかず

奈良に住む

見る夢もころっと変わり奈良に住む

悲し梅志さんの計

二三才ガタツと歳をとらされる

大阪市

神谷凡九郎

物欲が人間なんサとつぶやいた

恙がないその仕合せが分っちゃいない

コンピュータ楽し人の心を計らない
方程式通り出合うて別れたサ

岡山県 直原七面山

恋のあせりか化粧がのらず
時計も止ったままで農繁
覚悟はすでに出来て五十五
頼れるものは僕とその影

倉吉市 奥谷弘朗

旧正の分も餅米母がくれ
ひとすじに土を愛した手を恥じず
報告を速達にしてホッとす
あちらさん流儀に合理が割切られ

高槻市 福田丁路

国策に添うて雑草田を覆い
台北市孔子廟

孔子廟平和を祈る人で群れ

中部山地現住民

見せ物になって哀れなツォー族

苗栗の街角にて

辻待ちのリンタクがあり手洩かむ

兵庫県 大江秋月

三日目はもう寝ておれぬ妻の風邪
一合で酔える夫の頼もしく
両隣おんなじ土産ものを呉れ

八尾市 香川酔々

倒産は分からなかった生字引
市民税陸橋ばかり歩かされ
冷蔵庫あければ猫も鼻を入れ

小松市 四方天弘実

トタン屋根一雨毎に春の音
古美術にされて仏飯忘れられ
真夜中の街にクシャミの遠慮なし

倉敷市 藤井春日

毒婦とてやっぱり女杖が欲し
辛辣な皮肉相手に通じかね
その気骨惜しまれ浄土へ一人旅

倉敷市 木村千容

成長のひずみの中で青い息
老友の訃あいついで寒に入る
目を閉じておれば世界は平和なり

大阪市 木庄金三

山寺でうかしの美味いお味噌汁

温もらせた子に百まで数えさせ
夫婦旅せめてぜい沢してみたし

岡山県 大森 娛句 楽

孝行の電気毛布に汗の愚痴

盆栽の鉢に執られた伸びざかり

福寿草役目すぎたと咲き崩れ

小松市 馬場 魚 山

一線を引いて馴れ馴れしく女

保育園最初におしっこ覚えさせ

戦友の賀状手術をつけ加え

笠岡市 出原 真 奇

桃の木の次々に消える村淋し

定退のまだ小学生が二人居る

テレビ寄席一人で笑うむなしさよ

兵庫県 遠山 可 住

日傭いのくらしへ風邪が座り込み

保険かける年金かけるとややこしい

あんたはんでっかと趣味の初対面

岡山県 田村 藤 波

全力投球わしには投げるものがない

座布団の手前直には帰えられず

何の芽か判断つかぬ庭の隅

松江市 吉岡 通 児

いま掃いたところへ豪華な桐一葉

ざれ言の語尾がふるえた真剣味

乾いても降っても日本救われず

西宮市 若林 草 右

睨み鯛にらみ返して焼かれてる

食パンがお餅にかわる三カ日

大事そうに虫歯貫って帰って来

美禰市 安平 次 弘 道

作戦を変えられ入知恵があわて

馬鹿になる賢さがあり丸くゆき

言葉尻りとらえ理論は負けている

大阪市 河井 庸 佑

お互いに見ぬ振りをしてすれちがう

八方美人こづかいがまたつまる

気をもたすそのニュアンスにひっかかり

守口市 羽原 静 歩

下請けの義理へはそばそ生きている

トビ職のスイスイ昼へ降りて来る

お茶碗の家風いっぱい飯を盛り

愛媛県 渡辺 曉 童

ふとんの隅をたたいてくれる母米寿

反骨のむかしなつかしコップ酒

これ以上何がほしいと秋が晴れ

笠岡市 木山 要 次

靈魂は不滅とやらの一周忌

落語家の羽織脱ぐのも芸のうち

ともすれば不調を癌に結びつけ

和歌山市 野村 太 茂 津

買いかぶられ窮屈な日が続く

人生の落葉にも似て騒ぐだけ

仏様四度目ですよと手を合わす

岡山県 横山 一 声

最南端異国へ続く海広し

日南の浜の二月は春の風

南国の旅から帰って風邪を引き

竹原市 時 広 一 路

貝殻に過去は問うまい唯拾う

暇の無いのが嬉しく今日を生き

ストップが効かなかったのを悔やむ朝

島根県 小 砂 白 汀

遅々として春は土手を這いまわり

諦めるほかにすべなきいろは順

生きている顔で乾電池息がたえ

大阪府 島 野 大 吉

へそくりを日割で使い六十路活き

旅なれば妻の手を引く雪の道

おみやげの蟹に帰りを急がされ

和歌山市 垂 井 葵 水

人形が見てますと言う淡い恋

無関係という関係に念をおし

春一番競輪の屑舞い上げる

羽曳野市 榎 本 吐 来

求人にはみ出る齢にふと気付き

親ごろ厳しさだけの顔で責め

土壇場を黒字で飾る気の保険

東大阪府 竹 中 綾 女

当たたらどうしてかうして夢らし

ケチに徹し貯めたお金を何とする

離職して失業保険の有難さ

松江市 岡 崎 祥 月

笑う日もあるさと苦勞囁みしめる

ボールペン今日はなんだかすねている
構想をねってこわしている政治

竹原市 山内 静水

歩が揃ううちの嫁です娘です
親同士詫びてすんなり式日取り
二人の決意は何も欲がらず

大阪市 中川 滋雀

結局は子供が開けた瓶のねじ
よりかかる何かを読経に満たされず
店番のテレビに横目であしらわれ

岡山市 光好 陽子

療養をしてから自信のない体
墓参だけ帰るふるさと他人めき
転勤が軒並みせん別額をさげ

米子市 林 瑞枝

振り返る視線も嬉し娘を伴れて
寝台車養鶏ケージに似て不服
土地勘が出来て遠出の癖がつき

大阪市 天正 千梢

山水を愛し墨画をなぶり出し
すべての妄念山の寂が吸収し

ひやかしもならず父ちゃんの一人言

大阪市 室谷 鉄舟

だまされてだまして銀婚式迎え
いい湯だと歌って居れぬ汽車不通
降りすぎてスキーも出来ず帰られず

笠岡市 松本 忠三

新鮮な空気ばかりじゃ生きられず
お身体に障りますよで飯にする
立話しこんな時間と西東

奈良県 草深 醉升

暴騰へ余生プランをたてなおし
生かされていると念じて気を鎮め
隣席も向いも白髪でホッとする

大阪市 有信 新之助

酒のこと反省するのに酒が要り
厭な客くれたお金に頭さげ
人混みに酔うて静かな道を知り

久留米市 永松 道雄

病妻と寂滅為楽を通じ合い
汚染したこの世の空のいつ晴れる
老妻と恩給抱え庭仕事

入院(三句)

回復へ願いをこめる注射針
御見舞がかえり感謝の眼をつむり
誕生日に胃カメラ吞む破目となり

大阪市 福井多蘭子

今治市 越智一水

人生に消ゴムほしい時があり
お早うといえない訳は二日酔
貧しさは父がしていた通りする

姫路市 村上春巳

北条石仏五百羅漢

羅漢さん皆寒ぶそうなさぶそうな
ホルモンで祝う他国の誕生日
石仏のお顔も円ろし十輪院

岡山県 荻野鮫虎狼

春日和古人曰くを読んで見る
断絶の一日楽な父であり
味を見る女はちょっと目をつむり

小松市 浅野芳朗

談笑の洩れてる通夜は天寿にて
先生が反米らしい子の話

安全運転うしろのクラクション怒り

堺市 新谷笑痴

断われぬ立場知ってた寄附の額
鬼の面とればえくほが笑ってた
するだけの努力をしたと第三者

東大阪市 竹中肖二

施主さんの払いが悪い仕事ぶり
参考の為めのサウナで眼をまわす
こんな松手入れが無駄と云う庭師

松江市 小林孤呂二

蟹の味おちつき裏日本にも春
母さんが泣いているよと子が尖り
体育だけの取柄も父ゆずり

高石市 谷沢好祐

簾だけはせめて故郷に置いとこう
誰よりも酒を愛すの夫にて
団結々々渡り鳥でさえ

岡山県 池田古心

上品に坐れば足はスモンめき
やけ糞じゃないが何んとかなるだろう
コンマ以下卑下して六十五となりぬ

愛媛県 村上旭童

割勘へ淋しき性が顔を出し
真冬にはまふゆの色の錦鯉
やめる気の直言酒でごまかされ

大阪府 宮地双楽

口下手と思えぬほどによく喋舌り
戒名もつけて未来へ手をかざし
出稼ぎの父は万博先に見て

大阪府 西川誓二

早春の日だまり梅が香を運ぶ
駆引で云うた言葉を真にとられ
忙中閑テレビドラマに拭く涙

姫路市 隠岐不醉

月賦とは言わずうちにもカラテレビ
どこをどう減そかと会計思案顔
町の為などと議員によりいくつ

岡山県 出原敬一

一点を凝視そこから湧く妬心
豊胸の鳩に餌をやる平癒の娘
貸借が無いから苦いことも言え

岡山県 坂井三葉

直線を生きて尽きんとする命
お隣を真似た国旗がひるがえり
停年にまだある駄馬にむちを当て

和歌山市 土谷城石

地藏さままさか食べない餅が消え
ハネムーンまさか位牌で戻るとは
胸割って話せば共に過去を持ち

鹿児島市 土岐トク子

無言の茶うけてのみほす夫の目
人生の枯葉三々五々と散り
マスコミに乗って悠々自適なり

堺市 伏見茂美

さりげない便りに愛の深さ知る
茶碗から買うとはチエミ世帯じみ
駅待合夫に支那栗むいてあげ

松江市 中川晃男

ふるさとを墨絵にぼかして積もる雪
他人様の不幸で吸うた甘い汁

奈良県 西辻竹青

ゴミ吸うて一廻りした宵戎
物価高縁起の恵比須もよう買わず

兵庫縣 河原みのる

小説どころかあし元から孫の恋

今朝もまたやつこらしよつと試運転

鳥取縣 清水一保

寒行がのどかに見える良い日和

町議選の陣中より

激励の便りへ余力ふりしほり

富田林市 浅川八郎

写経終る尚空しさ振り切れず

杖をつき歩きよいなアと心から

高槻市 山田季賛

大根をタクシーで買う旅をする

客貨船豚も積んでる船の旅

八尾市 古川鶴声

脱税とルートの洋酒並ぶ棚

年頃を巫女で暮らして嫁きおくれ

加賀市 細呂木魯木

嫁の座は姑と夫と子につかれ

長男の義務許り続く慶弔費

出雲市 原 独仙

社で暖房家で炬燵を抱く身分

興し入れを待つどの部屋も百ワット

松江市 柳楽鶴丸

笑いがとまらぬ一たす一が五になった

犬も一緒に乗せて初詣

和歌山市 西尾公作

嫁がして風吹き抜ける父の胸

誘われてまさか割勘とは知らず

大阪市 榊本落児

ミニミニへ無遠慮な眼の酔うている

石仏の雪を払って語りかけ

京都府 清水谷句楽坊

御像拝しお若いなあと吾れ老ぬ

老いすぎて猫笑う程冬いじけ

自選

島根縣 藤井明朗

仕事を追うて生活にリズムあり

冬の陽を浴び春よ来い幼稚園

妻風邪に寝て台所も順番制

米作の転換不作を考えず

名古屋市 吉田水車

ビニール包装皮をへだててかく如し

ぜいたくな話し日本の米地獄
出を待つ間舞台の袖に添え乳する

追悼吟

梅志句集を正す浄机に春浅し

大阪市 不二田一三夫

二歳の恋人、松江へ行く（二句）
センセン（先生）と寝んねをすると枕さげ
失恋ってこんなものか発車ベル

寄席（二句）

くすばりと云われ芸歴三十年
未亡人同士でコンビ組む若さ

★

若本多久志

新戸籍つくって一人又巢立ち
心底をよまれてるとも知らず酔い
金婚も間近味噌汁の味つつく
あんたにはこれと玉露でもてなされ
そこはかの風邪に若しやと思う齡

菊沢小松園

気疲れの仮面のままの歳暮れる
波しぶきああ玄海は生きている
沖繩を語る眼になる憤り

塔すでに時代錯誤を悟らされ
秒針の忙しそうにたゆみなく

川村好郎

嘘ませて泣きつく立場になって貸し
地下街で迷い出てから又迷い

銀行から電話社長の低姿勢
娘の知恵を借るうれしさとわびしさと
ガイドにも見とれさせてる老夫婦

西尾 栞

妻と娘の内密話の嬉しそう
だまされもだましもせずに六十路過ぎ
胸に花今日は葬儀委員長

午前二時城下の誓いさせられる
無条件降伏したい女にまだあわず

北川春巢

長生きは第二の定年まで迎え
定期券で乗れば親しい街の顔
定期券脱線転覆の字がこわし
節分の鰯の骨をのどへ立て

昭和四十五年建国記念日
マイホーム小さいながら新の旗

川俣柳 初篇研究

(八十二)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

612 ほうづきを出すにも禿鍵がある

燕子

川端||禿は十二・三才の子供だから、ほうづきを仕舞うにも鍵をかけてある。

十うざしを禿起ると出して見る

九八・1926

女郎のタンスには一々鍵をかけた。

高須||禿の句には、あどけなさ、他愛なさを詠んだ句が多い。たかがオモチャにひと

しいホオヅキを鍵のかかったタンスに入れたというところに、子供らしい可愛らしさを詠んだもので、女郎のタンスは中が空だが、鍵をかけておくというウラは、それほど重要に考える必要はないと思う。

前田||「出すにも」はうまい。

藤井||禿のあどけなさ。

丸||句意には替。小生は禿のあどけなさより女郎の簞笥の強調のように思われる。

岡田||同。

613 不審紙だらけな四書のひひ物

一甫

川端||不審紙は、書物の中の不審なところに紙をつけて標とすることで、「四書」は大学・中庸・論語・孟子の漢籍。こんな難かしい本は売り払って、女郎買いの遊興費をかせいでいるどら息子。

足音がすると論語の下へ入れ

鞍馬先生から、「不審紙」は紅唐紙で、豆ほどの大きさにちぎって、漢文の読めない字のところへ、なめて貼っておき、読めるようになったら取り除く、と御教示ありました。

高須||「不審紙」は、上部が赤い細い長方形のフセんで、判らない個所がすぐ判るように本をとじても上方に出るように貼ったと思う。そのフセンを取らず払い物にしたというので、小さく中に貼ってあるのでは「不審紙だらけ」がピンと来ない。既出「ちうとうにして四書なども売払い」と同

想で、この「不審紙だらけ」と「中途」とは相通じるものを感じる。

清||この払い物をした息子は、労咳にならないですむ。

藤井||不審紙は鞍馬先生のが正解。小生亡父の漢書の裡に点々と赤い小豆大の紙が張ってあったのを記憶しています。小咄で、夫の鼻へ不審紙をつけてベニスの小さいのをなじつたのに対し、妻の頬へ不審紙を張りかえして頬の白いのに、あそこがくさいとなじつた話をみて、不審紙は？の所へ赤い紙をちぎってつばで張りつけたことが知れます。故に高須説のフセんに反対。難解の四書の勉強にあきて古本屋へ払い、その金で吉原へ、しかし勉強をつづけて四書五経よんでしまふと息子死に 宮二六よりは幸福かもしれない。

丸||小生は遊びを知らぬ生まじめな息子が労咳で死んだ後に、生前息子の読んだ不審

紙だらけの四書を払い物に出すと解している。即ち藤井氏引用句の如き場合である。こう見ないと、「不審紙だらけ」が生きない。なお不審紙は富士野・藤井氏両談のとり、おし紙ともいう。

岡田 不審紙は和本を見るとすぐ分かる。よく薄紅色の紙がちぎって貼つてある。なめて貼るので、爪ではがすとすぐ取れる。句解は、礎稿および藤井説をとります。不審紙はかり貼つてある通り、こんな七めんどうくさい学問はもう止めだと、それを古本屋へ売って女遊びに転換。

614 衣屋へ沓分四匁はらふなり

眠狐

川端 一「分四匁」は十九匁にあたる。十九の厄年に死んだ娘の振袖で、天蓋を衣屋へ注文した。

高須 一分四匁が十九匁で、厄年の十九とはずいぶんもつてまわつた句と思うが、そうでも解かねばつかみどころがない。はたして藩天蓋（ハタテンガイ）が十九匁で出来たかどうか必然性を感じない。

前田 十九匁はこの頃の相場で約三五百円ぐらいか。天蓋は出来そうであるが――。

この句ナゾナゾで面白くない。
清 礎稿に従う。

法衣屋へやるを惜しむは他人なり 七・36
天蓋は惜しいとはめる他人なり 二三・3
気強くもこなこなにする天蓋屋 一九・9
振袖を法衣の中で解きちらし 一五・23

藤井 振は九よ留は三よと天蓋や十九年は娘の大厄であり、また「三味線が二挺と琴のひくもの」（傍五）のように算術クイズ句。

丸 替。十九匁は実際の仕立代ではなかつたにしても、ほぼそれに近いものであつたからこの句があるのであろう。

岡田 頭でひねくつた、これこそつまりらぬ句。

615 女郎買だといわぬから母あんじ

菅江

川端 はっきり吉原へ女郎買いに行くといわずに帰りがおそいので、母親が心配している。

おかしさは母お持仏へ願シをかけ 萬四10
母親の目には朝湯と見えるなり 二一・17

高須 この句は親馬原の母を詠んだ句で、同想句は沢山あるがその中では「母親はもつたないがだましよい」につきよう。

清 はつきりいってくれれば、かえつて安心する。たとえ女郎買であっても、息子の行き先がはつきりしていれば。

藤井 女郎買いだといえはおこるだろうに云わぬから案じる母親馬鹿のアイロニーを云つた句。

丸 親心の一面をついている。
岡田 同。

616 呼んで来る内勝負附杯をみる
万 鵬

川端 角力見物に誘つた景かと思つたが、

鞍馬先生から、深川の遊里呼出し女郎の来るあいだ、角力の勝負付を見ている客と教えられた。深川八幡境内に角力が興行された。

五・28

呼出しは晴天八日客がふえ

高須 岡場所の一つ深川を詠んだ句で、呼んだ女が来るまでのあいだ、八幡勸進相撲の勝負つけを見ているのである。いまならば、「かかけに妓が来るまで野球かけである」で男なんてものは、そんなものである

清 「呼んで来る」の上の句を説明する必要がある。深川には「伏玉」と「呼び出し」の二種の娼妓があつた。伏玉は茶屋に住み込みの娼妓、呼び出しは子供屋と呼ばれる置屋にいて茶屋へ呼ばれて行く娼妓で、伏玉よりは上とされていた。主題句では「呼んで来る」で呼び出しを暗示しているわけである。一ト切遊びのあわただしさを詠んだ句である。

丸 礎稿に清説を加えて完全。
岡田 同。

八木摩天郎著

「古川柳に詠まれた

堺の人々」

送料共 七五円

アムール・バルチザン

東野 大 八

私はソ満国境のアムールという河が大好きである。ハルピンのスングアリーも嫌いではないが、アムールには変幻自在な夢がある。

スングアリーとアムールが、北満州の果、同江の東部で合流するのだが、その凄絶なばかりのスペクタクルな同江での壮観は、今も私の脳裡から消えないのである。スングアリーは出水期の日本の河川の泥水の様な赤茶けた色だが、アムールは黒人の肌を思わず暗緑色を帯びている。この二様の水質の相異なる大河

が、見はるかす地平線の底から中天にふくれ上り、白泡を奔騰させて視野のおよぶ限り、雄大で豪放な混流線を形成して雲間に没していくのである。アムールが魁偉な男性的大河とするなら、スングアリーはロングスカートのさしめ三十女といったムードだ。このふたりが、はじめてアムグンの密林の果でしっかりと結合していく姿は、今様風なら神秘的なセックスの象徴でもあろうか。いずれにしてもダイナミックで、量感溢れるそれは大自然の生理的エネルギーを感じさせて余りある。私

の感性の底に、今も密林の奥底の白い亀裂はふつつつと奔騰を続けてやむことがない。

アムールは、バイカル湖の東から発している、インゴダ、シルカ、オノン、アルグン、スングアリー、ウスリの各支流のとうとうたる水流を合して、ひたすらに海へと急ぐ。しかし沿海州近くにシホテアリン山脈がどっかと居据っているのに、アムールは大きく北へ迂回し間宮海峡に出る。

アムールは中国名で黒竜江、ギリヤーク語でヤムール（大水）ツングース語のアムール（平和）満州土語でハラムーレン（黒い河）といふところがあるが、ロシア語にはない。無理からぬことで、ロシア人がアムールを発見したのは一六四四年で、このアムールを下って彼等が日本の海に出たのはそれから二百年もあとだった。

チエーホフがアムールを下ってサガレン（樺太）の流刑地を目指したシベリア旅行は一八九〇年であった。「シベリアは、どうしてこう寒いのかね」

「神様の思召しでさ」

とがたくり馬者の馭者が答える。

「シベリアの旅」のへき頭の書き出しである。チエーホフをこの凍原の孤独な旅に馳りたてたものは、サガレン島（樺太）の流刑地を書くことに初まっている。

彼がひとり間宮海峡をわたるわけだが、この海底不定の、水深一メートル余の海は、アムールの流砂で、土人の舟しか安全度はない。間宮林蔵もこの軽舟に乗ったのである。だが、沿海州では間宮海峡でなく韃靼（タタ）ン）海峡で通っている。ダッタン人の命名だが、この人種はロシアでも中国でもない、純粹な土着民として一般に扱われている。安西冬衛の絶唱「春」は、こう記す。

春

てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていったこの驚異とされる短詩の底に、私はチエーホフを真先に感じ、林蔵のそよぐん髪の逞しさを思い、ダッタン海峡との名を冠したラ

ペルーズの碧眼の柔らかに触れるのである。

一八八〇年代にシベリアのシネフ地方で、ユダア人の大虐殺事件があり、一九〇〇年にはグリップス將軍が、アムール河畔で満州人の大虐殺の蠻行は有名で「アムール河の流血や」のうたまで残っている。そして最後に、日本人の記憶に残る大虐殺は一九二〇年に尼港事件である。尼港すなはちニコライエフスク。チエーホフは、この町からサガレンを指したのである。人口三千、どくろの眼のような陰気で暗い町と書いている。しかし、それから三十年の後には、島田元太郎という日本人の開拓精神によって一万二千の漁港としての繁栄し、アムールのピョートル、沿海州のキングとして、島田は君臨した。しかし、大正九年の尼港事件によって、三千人のロシア人と七百人の日本人が屠殺され、町は一瞬にして廢墟と化し、島田コンツエレンは潰滅した。

シベリア抑留でなじみ深いハバロフスクは、その尼港のアムール上流八百キロにある。そこから南のスーチャンへ三百八十キロすれば、陸路ナホトカへ出れる。

尼港事件から二十余年の後、俘虜になった日本軍將兵が、垢と汗と泥にまみれ、ぼろ肩のような隊列で、ブリキの空罐だけが丸腰にゆれて、カランコロンと空しく鳴っていく。

幾山河越え去りゆかば一の牧水の歌をかみし

めながら、祖国とは逆に北へ、北への旅をいく。絶望と悲哀に打ちひしがれた虚無の果ての感傷に、真赤に焼けただれた夕陽が血のようにはシベリアの果てに落ちていく。死と生のどん底の行進にアムールの風は、骨にしみた。ナホトカとは、みつめのもの、拾ひのものといたったロシア語で、帝政時代、一隻の難破に瀕した帆船がナホトカ湾を発見して逃げ込んだのに初まるという。ナホトカから上船して、日本へ最後の俘虜帰国船が出たのは、一九五〇年の春である。彼等がナホトカの港の岸壁を作ったのである。

ナホトカ、ハバロフスク、ブラゴエンチエンスクー私はいま、アムールをめぐってこうした街々への幻想に捉われ、今年か来年にはこの沿海州への旅をもくろんでいる。親友Tが三度目のソ連への旅で、こんどはこの方面に行く、お前も行こうよ、と勧誘しきりだからである。欧米各国へは、国賓待遇で招待されても毛頭行く気はない。だが、中国か、ソ連、後者はしかし沿海州しか私の頭にはない。シベリア出兵の際、赤衛バルチザンを救けたナナイ族の民歌が今も残っているという草原に寝る赤いバルチザン

タイガへはいつていくバルチザン
着物もろくに着ないで
病気の人も進んでいく

赤いバルチザンは可哀想

赤いバルチザンは、流刑地シベリアの徒刑囚の知能をすぐった革命で、ハバロフスクにはクラスノシチヨフ。ブラゴエにはムーヒン。遊軍としてフオンタウベというドイツ軍捕虜上りの将校の率いる独逸俘虜八万がいたこの赤衛バルチザンの行動を抑制しようとしたホルワットの率いる極東白衛軍。セミヨノフの率いるザバイカル政府。コルチャックが握るシベリア政府があった。シベリア共和政府樹立を目指すセミヨノフは、本拠を浦塩におき、白衛軍やチエツコソロバキヤ軍五万を統轄していたが、この連中はさっぱりやることがでたらめだ、今日は帝政ロシア側かと思うと明日はムーヒンに色眼をつかい、日本軍に肩入れしたかと思うと、とたんに同志打ちをやる。セミヨノフは色気狂いで、コルチャックは守銭奴、みんな火事場泥棒か、こそ泥野郎と、当時の現地人の話通り、お人良しの日本軍も手を焼いたものだ。

尼港事件のバルチザンの首領はトリビーチンで、その総参謀長が彼の二号さんのニナ。このアベック・バルチザンがなぜ日本人を皆殺しにしたか、いろいろ他にわけもあるが、ニナの日本人娼妓へのやきもちからだとの説もある。ヤポンスキー・ハラシヨのエトセトラムードに、私へのアムールの血は、今もこれを書いていても、ふくいくとあたたかい。

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四四年十月号
至 四五年一月号

路郎賞の選考委員が六名、川柳塔賞が三名になりました。

句数、作家数が約二倍なので、公平に選考委員を6、3にしましたが、研究の余地があれば、来年度は選考委員の比率がまた変更するかも知れません。

主幹は決定にだけ参加します。

七月号には本年度第二回目の中間発表をして、十月号で二賞が決まります。

なお、中間発表の句数は各選考委員とも限定されておりません。

路郎賞候補作品

若 本 多久志

酔うているうちは人生悟り切り
聖人のような妻なり息づまる
人を疑がえと訓えることの悲しさ

旅 風
鉄 舟
みのる

最後まで当にしていたノーチップ
一本一本私を見捨て歯がこぼれ
角帯の手ざわり秋のしめかげん
お向いさん外れてまっせと注意
宿命を知らず肉牛なお太り
魚こころ探ってみてる水こころ
もやしさえ力一杯生きている

川 村 好 郎

きかぬ子をうっかり叩いて手が痛む
和解した番茶つなぎの音をたて
組紐の一筋ゆるみ美が欠ける
真相をえぐればメスが錆びてくる
草刈機萩も枯梗もなかりけり
冷戦中なのに仲人頼まれる
下を見るはかない知恵を持ち合せ
ふところの金がいや味な口をきき
男女とはうれし半分ずつ生まれ
わが腰と相談してみて溝をとび

圭井堂 あいき
曉 童
古 方
肖 二
桃 路
徹 也
静 馬
柳 子
い わ
千 翁
旭 童
素身郎
吐 来
新之助
久米雄
恵 二朗

北 川 春 巢

リベットになり切ることに躊躇する
ツンドクの部屋にピカソが掛けてある
男女とはうれし半分ずつ生まれ
姓名学に凝り子宝に恵まれず
かゆいから泣いているのに乳をやり
ふるさとはなまり恐れるなれのはて
胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ
松茸が出ぬ詫び状のあほらしさ
たまに逢えば時計はっかり見てる恋
ためらいもなく一本の矢に射られ

西 尾 栞

石垣の大きさ小ささも理に叶い
マスコットだけ無事だった事故現場
女性上位男はおだて上手なり
美容師に十二神将の髪かたち
子が寝れば賢母愚妻として拗ねる

い わ
秋 月
文 秋
春 巳
珠 笑

夫婦だけの部屋で夫婦の話する

礎山

チャルメラはやくぎを捨てた男とか

一三夫

ゆつくりもしてられまさんと坐り込み

肖二

寡婦として廻り灯籠の中に坐す

葵水

さりげなく客を送って揉め直し

千代

冷戦中なのに仲人頼まれる

素身郎

問い詰めてやっぱりいやな事を聞き

鉄舟

単線もいいぞ車窓に嫁ヶ島

緑之助

荒唐の美とやらも鑑賞し

美代

ふところの金がいや味な口をきき

新之助

保存会獅子あえぎつつ舞終り

拳法

賊軍の祖先を祖父は誇りとし

敬一

水すまし池の深さをまだ知らず

菁居

菊 沢 小松園

さりげなく客を送って揉め直し

千代

おちるだけ落ちてダイヤの艶とねる

潮花

晩酌はかかさず屋はくすりのみ

醉升

夕暮れて哀しき女傑米をとぐ

美代

菊の呼吸処女懐胎もありぬべし

薰風

上位下位二人がそれでいいのなら

喜由

もの足らぬ顔してボヤを見舞れる

滋雀

除夜の鐘払え払えと響くなり

花村

相づちは打つが踊ってはくれず

圭井堂

正 本 水 客

人類月に立つ

さもあればあれ兼足で月はまだ踏めず

柳志

酔うているうちは人生悟り切り

旅風

蜂の巣へ近い裸んばを叱り

白柳

広 島

ここに来て胎児のごとき折りあり

薰風

風さらり秋の湖上を陽が洗う

代仕男

ころろぎよ何うろたえてわが膝に

阿茶

水すくう手触りに似た友に逢い

多志

ためらいも無く一本の矢に射られ

克枝

水よりも水色に透く熱帯魚

葵枝

長靴の重みもうれし水たまり

鬼焼

川 柳塔賞候補作品

清 水 白 柳

真夜中に飲む水しかとある天井

不朽

レジスタンスの蚯蚓が岩に干もびる

二三枝

抱きあげて空の広さを子と分ち

南奉

バーのママもう友達距離でなし

智子

幸福が待ってる手相抱いて寝る

弥生

M寸はもう父だけの用になり

小路

心の洗剤今のわたしに見当らず

君子

抵抗にあらず止り木揺つてみる

タカ子

スト権のない母今朝も米を研ぎ

幽玄

父の部屋いつか病間と呼び慣れる

鎮也

戸 田 古 方

時が流れる足音がきこえない

次章

風吹けば赤い造花も散りたかろ

比呂路

都々逸を上手に唄うて座が白け

新之助

笑う児の視線を追えば雀二羽

千歩

近よるものすべて疑がう栗のイガ

白汀

崩れない積木がほし夜である

政己

蛤がたつた一つのお吸物

飛龍

高う飛んでジェット機まだ秋空の下

まさひろ

枯葉ばかり集って日溜りの平和

タカ子

贅沢は内風呂さえも面倒がり

富子

橘 高 薫 風

風はふりむいて慰さめずに去った

芙巳代

スーケース葬花を捨てる道さがす

葉子

亡き人に嫌い抜かれた通夜の客

耕人

無職とは哀しいことを書かせられ

秋星

辞令辞令一家遊牧の民に似て

村調子

親もいるだろくにキックボクシング

不二

無縁仏去年の種子で咲く鶏頭

豊平次

こおろぎよ今日の時計も打ち終る

和美

仏 浦

群像の作者鬼神の外に無し

輝親

真夜中に飲む水しかとある天井

不朽

真夜中の時計は過去に急ぎおり

和美

父の部屋いつか病間と呼び慣れる

鎮也

戒名はどえらい人のように見え

芳月

川柳徳川記 (十三)

富士野鞍馬

家重

九代家重は、延享二年（一七四五）吉宗引退により將軍となった。時に三十五才。酒を嗜み、内寵多く、訥弁で喋ることがよく聞きたれなかった。それで大岡忠光、（忠相の同族）が一切を取次いでいた。宝暦元年（一七五一）吉宗の死後、忠光の威勢は益々あがり岩槻二万石の城主となった。このころから幕府の綱紀は弛み、賄賂は公に行われ、士民は奢侈放逸になっていった。先代からの賢臣大岡忠相も寛延元年（一七四八）には諸侯に列せられたが、吉宗と同じ宝暦元年（一七五一）に死んだ。そうして宝暦十年（一七六〇）四月に將軍職を長男家治に譲り、翌十一年六月十四日、五十一才で死んだのである。惇信院殿と号す。

小便公方

將軍家重は小便に近かった。宝暦六年正月の御謡初に、度々小便に立つので、觀世太夫は、御祝儀の「高砂」を数回謡いなおしたという。また上野東照宮や芝増上寺参拝には、その道筋に便所を新設したのであった。川柳はそれも詠んでいる。

小便をうやまって待つ供まわり（明和）

殿中刃傷

家重就任から三年目の延享四年、（一七四七）八月十五日に、殿中刃傷事件があり、細川宗孝が、間違つて板倉勝該に斬られた。

勝該は、本家の板倉勝清に恨みを含んでいたのであるが、板倉の紋が九曜巴で、細川の紋は九曜であったので、それを見誤り、後ろ

から切りつけたのである。細川宗孝こそとんだ災難で、翌十七日に終命した。勝該は、狂氣していたともいわれ、七日後の二十三日に切腹した。

この事件は川柳に多く詠まれている。

そうどふでへちまの水も取りはぐり（明六智三）

劍先が九曜へあたる十五日（一〇八九）

月あきらかにしてほしは隠れたり（一二三三）

けん先へ九よふの向ふ十五日（二二天二）

その夜の月に近ツ星九ツ出（安九・六二）

月の岬に近星は九曜なり（一二三三）

九ツの団子月見に味噌を付け（四二二八）

星の影消えて月見は闇になり（四二二三）

名月に九曜のきへる不慮な事（三四二四）

血連磨になつて月夜に御退出（八六六七）

九ツの星が十五の月にきえ（八六二一）

明月に雲かくれにし和歌の家（八八九五）

名月だのに一トやしき魚鳥どめ（天元宮二）

十五疋早馬の出るふりよな事（三三二六）

星だたり月夜に後家が二人り出来（天二一）

十五夜のそそう無理とは思われず（三四二四）

といずれも細川九曜の紋と八月十五夜に附合している。それから

其後は御袖に紋がふたつふへ（五三二九）

と、細川の七ツ紋ということになった。

細川家は、熊本五十四万石で、家宝に血連

磨の一軸があり、幽斎以来和歌の家といわれていた。

家 治

十代家治は、家重の長男で、宝暦十年（一七六〇）四月、二十四才から、天明六年（一七八六）八月二十日五十才で死ぬまで二十七年間の將軍であつた。

家治は、元文二年己年生れであつたから、宝暦十年に、長崎の灸医が定めたという「灸忌の事」に「己年の人は年中よし」と書かれてある。こんなところにも將軍にはばかつたのである。

卯腹辰股とらまへてすえ
という灸忌の句がある。

（武一八八）

田 沼 意 次

おきつぐ

田沼意次は、家重の小姓であつたが、宝暦八年（一七五八）には遠州相良一万石の領主となり、家治が將軍を繼ぐに至つて、益々親任せられ、明和四年（一七六七）には側用人（二万石）となり、相良城を築いた。安永元年（一七七二）には老中に累進し五万七千石を領するに至つた。

相当敏腕であつたが、息子の意知を若年寄とし、親子で収賄の悪評を、大きく残している。天明四年（一七八四）三月二十四日に、

意知（山城守）は新番の佐野善左衛門に殿中で斬られ、二十六日に死んだ。善左衛門は四月三日に切腹したが、民衆の同情が集まり、「世直し大明神」と崇められた。

としよりの若死をするふりよな事

（天四智三）

と川柳によまれ、

斬られたはばか年寄と聞くとはや

山もお城もさわぐ新番

という落首も作られている。

天明六年に家治が死んだので、意次は老中をやめさせられ、所領を削られ、屋敷は接収され、天明八年、（一七八八）七十才で死んだ。

役人の子はにぎにぎをよく覚え

（初六）

水が出て元の田沼と成りにけり

（七五二六）

その後、松平定信（白川城主）が老中となり改革善政が行なわれた。

川 柳 確 立

家治時代、明和二年（一七六五）呉陵軒可有（木綿）が、川柳評前句附から選抜して「俳風柳多留」を発刊して「川柳」が確立したのである。その柳多留は天明八年呉陵軒が死ぬまで二十三編刊行され、それが「川柳」として今日に継承されている、うがちの十七音詩である。後世それを頌して、

ことの葉の霜枯はなし川柳

（八二三九）

芭蕉程手に葉の広い川柳
芭蕉はど葉のひろくなる川柳
埋れぬ名は宝井と柄井なり

（九七三）
（九九三）
（一〇〇一〇）

―其角と川柳―

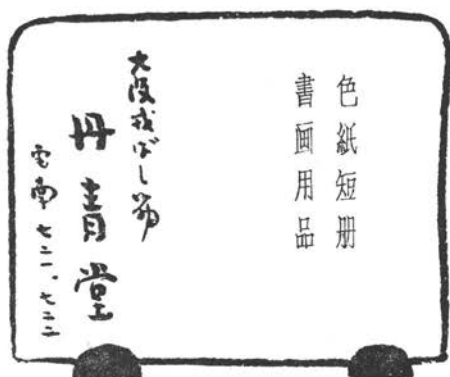
草も木もなびく吾妻の川柳
人情を匂にしたのしむ川柳
遠国迄も流れ行く川柳
敷しまの流れ汲こむ家内喜樽

（一一四二八）
（一二六四）
（一四三八）
（四六八）

などと川柳に詠まれている。

☆

▼前号秀句鑑賞訂正——24Pの素顔とは耐えた涙の通るとこ 水粉千翁。



同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 榮

粉雪に薄陽して冬の詩が見える

正本 水客

旅行吟は彼の独壇上で今更言うまでもないが、この句前書の必要がないと思う。唯々粉雪と冬と言う同季節の言葉が気がかりだ。

ついにやって来た六十の誕生日

浜田 久米雄

彼とは確か一つ違いとおぼえている。この気持は自分にも充分あった。然し還暦になるまでうたえなかった。待つわけではないが、六十近くなるとこの心境だ。ずばり、ついにやって来たは偽らざる気持だ。久米雄さん人生は之からです、一杯のんで元気に行きましよう。

怒り持つことも忘れず進まんか

西 いわを

長い斗病生活の彼、年齢からいって世捨人のような気持になるのが普通。だのによくも佳い句をうたって下さった。怒りをもつこともものがよく効いている。御退院も間近ときいている。どうぞファイトをもやして下さい

すぐ顔に出すので軽くあしらわれ

奥谷 弘朗

路郎先生は川柳は人間陶冶の詩だと教えて下さった。然し教訓であっても、評語でもない。この穿ちの句のうちに我々は磨いていかなければならない。

コンパクト閉じてノックへ身がまえる

有働 芳仙

最初マンシヨンの出来ごとかなと思っただれど、さすればコンパクトでなくて、三面鏡だし。この身がまえる女性と、之から起る事件が非常にドラマティックで面白い。身がまえるが効いている。

送られる長さをベルに救われる

榎本 吐来

誰もが経験されたことだ。ベルに救われるが良い。矢張り川柳は言い廻しだね。この反

ご投句にはゼヒ、

川柳塔柳箋

一冊六五円・送料三五円

対の、送られる二人の仲をにくいベル、じゃ弱い句になる。

男か女か痴漢躊躇する

木山 要次

初めて笑った句だ。全く混迷した風俗で、痴漢ならずとも、首をかしげるこの頃。躊躇する痴漢をもってきたところ旨いね、面白いね。

女上位おふくろの味遠ざかり

福井 多蘭子

味噌汁に漬物に、おふくろの味という言葉が流行っているが、女上位をもって来たところは成功だ。母なるイメージは、あくまで縁の下での力持だもの。

(次号は菊沢小松園氏担当)

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない

河野君子

昭和年代の夫婦は横に並ぶ。いや横に並ぶどころか一つになって歩いてゐる。女性上位か衆目も相関せず妻の方からからみついている。にも関わらず、倦怠だ離婚だと別れてゆく夫婦が多い。明治大正の夫婦は縦に相当の距離をおいて歩く。夫唱婦隨の姿か。そして銀婚式だ金婚式だと添いとける。

或る瞬間愛も打算の驕を持つ

黒田真砂

愛さえあれば土鍋さげてもと飛び出すが、食うことのきびしさには勝てず、相手がこう出るならと加減する心も動く。或る瞬間とはうまく男女の心の隙間風を詠んでゐる。

さすらいの涯を枯葉は地に結る

岩谷二三枝

有為転変の人生、盛んなる時は自我に強く、我が才能全力を過大視するが、成すこと、計画すること逆行重なれば、己を失い、自暴自棄になりやすい。さすらいの涯の枯葉になつて地に結る。それが凡人の常か。そしてせめてもの救いか。含みのある句である。

二十年続く賀状のみつからず

別宮すき

人情紙の如くか。人間関係ほどむつかしいものはない。賀状の句は沢山接するが、この句には何か教えられるものがあり、捨てがたい句である。

休憩時間確保滞貨の中にいて

平野光道

まさに時間切り売りの時代である。八時間労働でいくらである。残業すればそれだけの報酬貰わねば働かぬ。そのくせ八時間仕事を給のように延ばす。金に動くのか、仕事に動くのか、ここから考え直さねばならぬ。

持つものを持てば静かにものがいえ

河原林比呂路

数億円の遺産相続のため、一家親戚を猟銃で射ち皆殺しを果し、放火し、自分も又自殺した事件が九州であった。持つものを持つただけでは静かにものが云えない。金を生かすも殺すも人間にある。静かにものいえる人になりたひものである。

二三人死なねば歩道橋建ちもせず

谷森和風

二三人死んでも、いや予算がない、善処しますが多い。後廻り後廻りするのが政治か、先手を打ってゆくのが政治か。それなことを奮慨し皮肉った句である。

(次号は若本多久志氏担当)

川柳家必読の『笑いのテクニク』

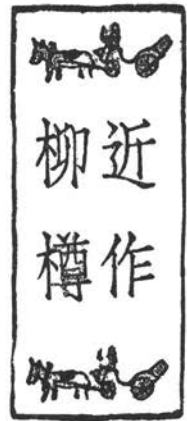
秋田実主宰・不二田一三夫編集

五月号「漫才」

定価 百円
送料 六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八



北川 春 巢 選

松江市 村 松 醉 歩

精薄兒育て楽しい夢を見ず
雑草になれとデスマスクが叱る
春が来た旅に餓えてる妻を連れ
妊らず妻は夫婦の詩を綴り

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

社会勉強になったと言ってあきらめる
因習は脱げず裸にようならず
人形をあやつる糸が見えぬだけ
賽銭の余りを鳩にくれてやり

大阪府 阪 上 十 止 庵

酒やめてから一番に箸をおき
バカになりきるヤケ酒はとめるまい
帯結ぶだけに実家の母を呼び
過去はどうあろうと持てるものの勝ち

松江市 津 川 紫 吻

公私共多忙そろそろ桜咲く

小人の閑居愚痴いうことばかり
無医村で医者の子らいな子が育つ
日向ぼこ此処に余生のひと駒が

兵庫県 荒 井 良 枝

拝観料払うて拝むのを忘れ

八百長へ片唾をのんだ馬鹿らしさ
ひとり待つ子どもを心の灯と勤め
内職の腰を叩いてみるも年令

竹原市 楠 貞 子

貧乏のひがみではない寝正月
米俵やっぱり芽出度い姿なり
受験の灯母断りを言うて寝る
出産の笑顔は同じ嫁姑

銀行が金貸せたがる世とかわり
新潟県 高 野 不 二

万博万博と私に縁がなし

コマーシャル皆うまそうに飲むお酒

世界旅行呉れるクイズを見る阿呆

守口市 樋口 一案

チンドン屋顔負けの服着て平気

中古車へ俺もこんなやと思う

労働者の税金で立つ国に見え

鏡までぶすつとふくれた顔になり

今治市 伊藤 一郎

宿題はテレビ見乍ら出来上り

定休日女房に指圧して貰い

俺の面より妻の皺気にかかり

店じまい改装をして売り初め

鳥取県 両川 洋々

小便をする間も社長金になり

カスガイの子供叩いた日の孤独

かんじんの話へ酔うた振りをされ

欠点の一つお酒にまた飲まれ

大阪市 水谷 竹荘

緋の蹴出し見せて女将の春三日

舞初めの衣裳は京へ染に出し

病後ただ妻のペースにたよりきり

鉛筆をけずり小さな黙否権

高槻市 山田 スミ子

口実を上手に作る娘に育ち

春を待つ暮しへ春がおとずれる

反対はしてたが起工式に招かれる

腹の立つ話ソッポを向いて聞き

大阪市 江城 修史

梅志師を偲ぶ一句

梅一輪来世も老師の傍に咲け

ほころびを繕う愛にある打算

灯を消せば昂ぶる老いの残り火よ

竹原市 三宅 不朽

ぼたん雪塔に湧きくる近親感

逢うだけの女ひとりへ闇夜透く

ブランコのような人生かも知れず

島根県 堀江 芳子

窓叩く風もいつしか春の使者

すぐ帰りたいのに母の荷ごしらえ

家中のお客にされて夜は更ける

大阪市 小出 智子

せめてもの春柄を着る市場籠

焼きいもの値に親しさが消えてゆく

思ひ出を流すきれいな河がない

大阪市 小 谷 葉 子

続編のレター恋をほのめかし

変装が私に似合う十二月

何とまあキャデーの重たい日

竹原市 脇 本 政 己

良心よねむれ生活がかかつてる

彼れの愛にすいよせられてゆく紫煙

むなしさへみないそがしいうしろかげ

下関市 志 賀 木 石

忠告を素直に聞いてあなどられ

氣にそまぬ役もこなして宮仕え

信頼の妻の目子の目やらいでか

仙台市 川 村 映 輝

公約を果たす予算が分捕られ

赴任して独身となり羽のばす

みみちちく取立て億を脱税し

貝塚市 行 天 千 代

出世して借りた昔を忘れ果て

楽隠居どころか子守りで肩こらし

肝炎にて入院

入院なんていいカッコの牢屋です

高知県 山 川 勝 子

白髪なら染めもしように禿げ上り

火の車若は外車で飛び廻り

アルバイトしてみても金の有りがた味

大阪市 河 野 君 子

何時の間に娘の歩に合わぬ母となり

理由なき行動春の足音

理窟云う子の成長を咎めまい

島根県 大 森 孝 華

冬眠へ機構改革春を告げ

良心に恥じぬ自信の勇み足

紅を引き年下あやすもどかしさ

岡山市 谷 森 和 風

純真な心なに色にもそまり

モデル嬢栄養失調ほどにやせ

仲人の靴は娘にそろえさせ

新宮市 大 矢 十 郎

同名の死へふっと来る不安

妻が煩染めて慌てた娘の初潮

ジャズ化した君が代太鼓で身が締め

大阪市 島 田 雄 峯

尾を振っているのは私かも知れない

なるほどすぐに妥協の不甲斐なさ
中年を忘れて蒸発したい恋

広島県 南条露声

うちの娘が戻ればテレビ唄になり
酒だけは押しも押されもせぬ代理
ぎり切の抱ようくずす足の音

大阪市 西本保夫

平社員ゴマすりぶりも板につき
ネクタイをすぐ外すくせで平社員
平社員どうして飲んだうまい酒

神戸市 横山孜孝

湯の町の丹仙男女の区別せず

仮縫の鏡へ世辞もまた嬉し

ファッションショー現実が外で待っている

今治市 真山国彦

叩いたり振ったりラジオ気嫌取り

総選挙終れば物価又上げる

外孫にまだじいちゃんと呼ばせまい

大阪市 河原林比呂路

人生にシグナルが無くまた迷い

どう嘘をつこう行きたくない招き

自動ドアだけは僕に素直なり

米子市 増田竹馬

古稀の春新入幕の心意気

七十の手習い色紙箱で買い

賢妻は折れるチャンスを得る

島根県 梶みどり

受験票とどき闘志わきたたせ

いじめられ可愛がられて鉢の梅

生活の疲れが友の言葉尻

八幡浜市 別宮すき

幕掃除だけの私の里帰り

色白は似ずに血圧だけ遺伝

新芽みつけあわててやる肥料

岡山県 武元柳子

雛の間は明るく仏の間は暗い

咳止むを待って話のつづきする

蜜柑食べただそれだけの銀婚式

東大阪市 落合思月

好条件ばかりを母娘不安がり

働いて居る新妻の口がすぎ

お互にあだ名で呼んで夜を更かし

岡山県 目賀芳月

スパルタで育ちベコベコして仕え

十円の寄付がトップの世を偲び
チャンネルは何時も同じ隠居部屋

大阪市 鈴 木 生 仏
ヤドカリはサザエの空家大きすぎ

風呂銭も今は小銭と思えぬ世
忘れてた借りを珍客とりに来た

大阪市 田 中 多 幸

倅せは良い誘惑がつきまとい

値上りはお賽銭にも一万円

初夢が過去を忘れぬ恋でさめ

大阪市 花 田 繁 子

いけ花も実も大型のお師匠さん

科学時代豆撒き姿に苦笑する

タクト振る孫を見せたい人は居ず

大阪市 吉 野 志 津

一方通行光が波が続く道

うっぶんをボーリングにかけ明日に生く

馬の顔不在ギャンブル場外券

大阪市 木 村 濁 水

風邪引きに寄ってたかってしてしまい

大寒の水のうまさを臥して知り

浄土への旅費に小銭を貯めておき

大阪市 本 間 満 津 子

フルコース食が細うてああ残念

邪魔にした小銭が役立つ月給前

何をしに来たかと珍客怪しまれ

守口市 岸 本 豊 平 次

子の奮起願って隣りを誉めておく

捨てばちになっても姿勢崩すまい

寝屋川市 福 富 隆 子

いつ死ぬか入歯なおそかやめとこか

結納は定期預金を包んでき

河内長野市 森 本 黒 天 子

ドラマではキッスたやすく見せて呉れ

新婚の道具揃うて子が出来ず

神戸市 来 住 タ カ 子

悔いの傷一つ一つを縫う寡婦で

デスマスク水で取ろう炎の女

東大阪市 宮 西 弥 生

旅人もたたずむ古都の雪景色

香水を好む女で夢多き

東大阪市 坂 東 若 芽

バイバイも投げキスもして豆紳士

お年玉はずれて欲しい良い賀状

大阪市 半田夏生

年賀状追記の方にある魅力
初詣ミニとはちがう裾さばき

大洲市 堀内 曉風

二度目から母も来てくれないお産
好きで好きで一緒になったのが家裁

愛媛県 嶮本 満子

グチふさぐキスヘムードが湧いてこず
雨戸打つ風にも彼を待つ心

岡山県 武内 雅堂

古本屋ばかりあさって職がなし
恐いものみたさに女歩き出し

羽咋市 三宅 ろ亭

梅に恥じ桜に恥じて六十年
停年はもう会議では物言わず

島根県 錦織 文子

寒風と話してるように麦を踏み
ともかくも心臓でいく寄附集め

広島市 榎田 英詩

食前の祈りに腹が派手に鳴り
勉強勉強何処ぞへ漂流したくなり

尼崎市 中谷 利美

両替を頼むたばこは二つ買ひ
家計簿の円を切下げする物価

八尾市 飯田 一治

頼りないゴルフ寝床で友を待ち
貧乏に馴れたと元気な友便り

大阪市 藤田 頂留子

良い品やけどふところの気に召さず
風船を呉れるお菓子と子はねだる

七尾市 松高 秀峰

台所出来て貯金をみなおろし
控え目にすれば出世に見放され

大阪市 黒田 真砂

ネオン点滅愛も幽かな翳を持つ
近道をすれば工事の札が立ち

鳥取市 近藤 秋星

米でさえ作るなという世に変わり
バレンタインの日にも持てない男にて

泉佐野市 大工 静子

七回忌御無沙汰同士顔が合う
一人では着れぬ着物を荷に持たし

倉敷市 竹内 翁童

きっぱりとことわってから気にかかり

愛想笑いでもつれときほぐし

浦和市 吉岡

茂

よそゆきの声で会社に妻がくる
乗ってれば着くと急行やめる母

島根県 榊原

秀子

砂山を築く思いの恋すすむ
わが胸にきかす言葉を友へい

鳥取県 林

露杖

この稼業継がせたくない継がせたい
豊作が政治狂わす三年目

竹原市 岡元

春昇

信じたい心が手紙を又読ませ
着ぶくれの老いを笑えり寒椿

今治市 今井

松花

病院で会うて元氣かとも聞けず
風邪引いたのも飲み足らぬせいにされ

今治市 大本

バット

段々に似る母との差二十年
両方に後押しがあり平和来ず

今治市 古野

伶人

陽の当る部屋ヘナースも寄って来る
市場籠にも最新の型があり

今治市 原田 輝親

汚染地区指定地という故郷を持ち
汗かいてペタルを踏めば気がほぐれ

羽曳野市 麻野 幽玄

倅せに見られて今日も共稼
積木組むように思索の日々続く

泉大津市 米原 靖子

美しく嘘も言えます喫茶店
想いとげ虹片脚を消し忘れ

大阪市 堀口 欣一

弥次喜多のようにベレーの二人連れ
定年後お札奉公のように勤め

八代市 船木 史朗

先の奥さんがと倅せそうに妬き
この人へ賭けて見る気の足袋を脱ぐ

竹原市 生信 笑子

ドレミファソラシドそろそろ春もやってくる
人間をにくみ人間として生まれ

鳥取県 川崎 秋女

雑草にも似た半生をもつ強み
帳簿みなやめてのんびり小商売

和歌山県 ふき あげ虎城

陳情書大臣の名を問ひ合わせ

地下街を午後の歩調にして乱れ

笠岡市 山 本 柏 生

お手盛のベースアップは超党派

鯉のぼりの方へ保険屋足をむけ

堺市 羽 田 一 扇

うんち今朝出来ずラッシュの人となる

桜咲く頃妻の手にマニキュア

今治市 渡 辺 南 奉

病名は不明注射を打ってくれ

三度目も合わずソロバン変えてみる

東大阪市 吉 岡 嘉 子

春泥に足をとられて旅半ば

やがて散る花の姿の極まれり

京都府 福 村 飛 龍

口ぐせの馬鹿にもなれて黙否極

直ぐ妥協してゆく弱さ見抜かれる

香川県 伊 藤 歌 子

炭焼のあるじも今日は旧正月

霜の朝はほかむりして麦に立つ

岡山県 本 倉 英 峰

賽銭を値上げしたのにまだ嫁けず

テレビなら政見よりも顔を見る

札幌市 平 野 青 夜

戦争を知らぬ子何時かガンマニア

爪染めて男のあらをみんな知り

諫早市 原 田 明 春

くどいてるコタツへ銚子冷えており

めぐり逢い銚子が過去へ引きもどし

今治市 薦 本 昌 道

花飾る女らしさがある勝気

六十にこんな若さがベレー帽

大阪市 岡 本 まさひろ

捨て鉢に生きとし生けるレジスタンス

一方通行向いが一番遠いところ

八尾市 覚 然 坊

貴婦人の愛玩と云うブルの顔

悪夢から醒めた夫で灯が明かく

大阪市 多 田 富 士

断絶の親子をつなぐプラモデル

珍客は訛りそのままふけた顔

大阪市 松 岡 進

倅せな暮しにホテルのマッチが出
後取りは居ても老いこむ齡でなし

東大阪市 斎藤三十四

定年者優遇求人欄

読むまいとすれど目が行く求人欄

大阪市 松岡茶々坊

六十になつても気持は四十代

飲みすぎて入院したのに隠し酒

堺市 墨作二郎

羽化の地に離農詩人の火を移し

岡山県 河原孝女

マッサージすれど鏡がうつすしわ

和歌山市 増田めぐみ

明日のない友とも知らずお茶を飲み

和歌山市 増田次章

なんにもないが胸だけはって生きている

鳥取市 有田鹿の子

伸々と大樹の如く子は育ち

竹原市 簗田浄美

微笑みが消えた世界にいる不安

松江市 大峠可動

こなごなに未練砕いて知る孤独

島根県 志賀美栄

日の丸を揚げる倅せかみしめる (建国の日)

岡山県 山田止水

紫陽花の性たたかれる雨に咲き

兵庫県 高橋近江

里帰り母食べさせて高楊枝

和歌山市 仮家和美

熱帯魚喫茶の断層覗かせず

島根県 中島英子

一騒ぎさせて落ちつく職場の恋

大阪市 影山一風

きまぐれの文通ほんまの恋になり

大阪市 平井露芳

物価高預金の利子もちよっと上げ

京都市 丹羽英二

パパママは吾子の晴着へ嬉しそう

大阪市 村島秀村

女嫌い種をあかせばみんなすき

大阪市 今井隼人

新聞を読んでラジオも聴いて居り

抄 輪 九

人妻に春の齒車囁み合わせ
鐘をきく女は母の雛飾る

堺市 墨 作二郎

棺覆うとき最も星条旗らしい
ウィンドウに僕の怪さが映ってる

松原市 谷垣史好

冬の恋 海老の背筋を見ていたり
冬の恋 白魚よりも透き徹り

大阪市 橘高薫風

炎の性を押え氷雨の下に佇つ

倉敷市 小野克枝

噎れている唄 よろこびの酒にしみ

倉敷市 水粉千翁

登りつめたところで首をたしかめる

富田林市 定金冬二

君という舗道の亀裂あざやかに

竹原市 三宅不朽

忘却があつて夫婦の添いとげる

大阪市 西出一栄

ポケットに腕 その腕をほり出そう
猫かぶろ 死ぬまでかぶろ福寿草

大阪市 神谷凡九郎

有りもせぬ智恵 脳味噌で音がする

札幌市 平野青夜

エレベーターガールと僕と二人です

八尾市 高杉鬼遊

目をふせたまま 今日明日も明後日も

竹原市 生信笑子

不意打ちの 女の膝が小さすぎ

大阪市 小谷葉子

坂道を登りバランス崩れたり

岡山県 武内雅堂

選 柳 白 水 清

とうとうと落ちゆく滝に過去を悔い
倉敷市 竹内翁童

朝夕の着替えチャックがひねくれる
小松市 馬場魚山

待ちぼうけ昨日のかたき打たれたり
富田林市 浅川八郎

金と地位があるから親しみが湧かず
岡山県 出原敬一

小手をかざせばあれも欠けこれも欠け
愛媛県 渡辺曉童

夫婦は他人 子供には血がかよい
松江市 柳楽鶴丸

真剣な顔でおしっこ こらえてる
神戸市 仲 どんたく

許す気でなくあきらめと知る返事
神戸市 来住タカ子

出る所へ出る気でいるも女なり
鳥取県 両川洋々

入院もここまでくればすえる腰
大阪市 酒田清子

人生のたそがれ 役が欲しくなり
大阪市 金井文秋

老妻の歩巾に合わず大真面目
出雪市 王 紫

結論を出せない父の気も知らず
大阪市 阪上十止庵

掌の窪へあなたに味をみて貰う
今治市 月原宵明

ネクタイを結びながら母へ口ごたえ
大阪市 本庄金三

男にも生理休暇のほしい朝
清水白柳

川柳雑誌昭和三十七年三月号に「同人誌はその経営の立場上やむを得ず緩選をされていられるのであらうと思われるが、甘やかされるということほど作家にとつて不幸なことではない」ということが書かれている。私がこの欄を受けもったネライは、その不幸な作家を救い出すためであると言つたら思い上りも甚だしいと言われるかも知れない。が、私はあえてそのそしりを甘受するつもりである。それ位いの意気込みがなければ、雑詠欄を一つ殖やしたことが無意味になつてしまふであらう。

今月は前月の投句者よりも三割以上殖えたのだが、御覧のように発表数は減少した。それだけきびしくなつたのであるが今後とも追々

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

情熱がそろばんづくへ冷えかかり

言い負けても母は笑顔をくずさない

言い分がある膝お茶に手をつけず

小松市 山上 千太郎

雪つもるのも観光となる名園

今日はおそくなるよと靴をはきながら

和歌山市 秋月 宏方

古々米に似ているような年となり

世界地図日本はここに億も生き

名古屋市長谷川 鮮山

無い袖はふれぬ一方的な弁

と敵しくしてゆくつもりでいる。第一回に発表した作品を見て、あした傾向の句がよいのならそんな句を出すといった声も聞くが、心の底から生れた作品と、付焼刃の作品との見わけがつけられないようであれば、いさぎよく選者を辞退しなければならぬ。九輪抄を通じてこれからの現代作品はどうあるべきかという大きな命題に対して取組んでゆくつもりなので、みなさんの作品によつてその答が出されるようないい作品を見せて頂くことをお願いしたい。そしてその作品によつて選者自身も成長してゆきたいと願っているので御協力を賜りたい。

平静に戻り駒読む王手飛車

大洲市 米沢 曉明

団地にも放送局という緯名

鈍感な妻と信じていた不覚

上着脱いでまでストーブ燃してる

今治市 月原 宵明

遊ぶ奴ばっかり春の伝言板

接待をうけたか意見軟化する

今治市 長野 文庫

値札ままのしをつけたいプレゼント

伝説を真実にして観光地

岐阜県市川 鱗魚

知恵熱の診たて医者にもお茶を出し

鍛持たぬ農夫税吏の目に追われ

梅志さん さようなら

中 尾 藻 介

梅志さん

この句集が見えますか あなたの句集です
後藤梅志著 「秀句鑑賞と梅志句集」

このとおり ちゃんと刷ってありますよ
あなたが 選ばれた
米寿色の表紙に

あなたと私の仲は

男女の仲にたとえたら

心中まではゆかないけれど

ゆうべの行先を追及し、とっちめる

恋人同士

去年の秋

あなたは私に

お電話をくださいました

三〇四年前 せんば句会で

二度 ごあいさつをかわした

その時のその声で

「覚えていてくれますか 後藤梅志です」
覚えていてくれますか

まだ恋人でそのときはなかった証拠

「句集を出したいがそちらで刷れないか」
「一応当たってみます」

それから句集出版へスタートしました

急いで句集を出したいあなたの願いは

来年三月の出版でもやむを得ない

やむなく変りましたけれど とに角

動けないあなたに

代れるところは私が代ることにして

あなたの一人倍の凝り性も知りました

あなたも私の言いたいこと言いに嘩然とし

たはずで まるで自分の句集を出すような

注文をつけるのですからね

「索引なんか無用と思いますがね」

「入選者のトータルなんて劣等感を起さすだ

けですよ」

「雑文にほかの人のまで載せるのですか」

所長としてロククアウトを日本で最初にや
つてのけた人に

「ではそのほか一切お任せください 誤植
だけはない本にしてみせます」
と、タンカまで切ったのです

一月十三日、忘れもしません

初校のゲラ綴じを持って あわてて

大手前病院へ駆けつけたとき

あなたは

おぼろげな聴覚を残して

九分意識不明でした

「もうすぐ句集出来ますから頑張ってください」
あなたはベッドの上の虚空に手を差しのべ

す仕草だけで
「ウン」

と答えてくれましたね

でも本当は何も聞こえていなかったと思

います いっそそう思わしてください

出来上った句集を撫でながら

「写真の仕上りも上等だわい」

「短冊の配置もまずまずじゃ」

「まあ、こんなものかな」

「たくさん買ってくれば嬉しいことだが」

そう呟やいて貰わぬことには

一切は「無」に等しいのですから

それを手にしないでは死んでも死にきれぬ

宿願の処女句集だったのですから

二日の後 梅志さん

あなたは そっと帰らぬ人になりました
二十日の後

追悼句会の日やっと本が出来上りました
あなたに捧げる

この 後藤梅志著「秀句鑑賞と梅志句集」

目に余る誤植をお叱りください

活字の立て方のまずさをお許しください

それでも なお

あなたの本は 類い稀な本であります

この世に残されるに足るホンモノの本であ

ります

人間が いつまでも生き続けるということ

の真の意味を示す本であります

川風のつらさ涼しさ靴磨

裏庭で椿の艶が出てるなり

もう金が出来団地には懲りました

妻と子にひかれてただの棋士になり

藤本礎山氏を悼む



故 藤本礎山氏

奥谷弘朗

川柳一家として有名だった。藤本礎山さん
がなくなられた。わが川柳塔にとっても、鳥
取川柳会にとっても大きな損失である。

二月八日に胃癌と言う不治の病で五十九才
というまだこれからの若さでついに帰らぬ人

直された癖で誤っている謡
つり革も西成線は 油ぎり

親分に食わして貰うために拘り

もう一つ屏がしまる大金庫

乱能を見るのは女弟子ばかり

満月を見ている 人が生まれそう

このような句を作る人の

川柳の庶民性と高貴性を併せ持った人の

作品鑑賞が また

一読に価することは

次のような言葉をまつまでもありません

「万象はこれ、己れの心のおもむくままに形

を変えるものであることがわかる」

「句材は古くとも 少しも意とするに当らな

い 作句心が清新であればそれでよい」

になってしまった。

一月二十日付の奥さんの佳女さんからのお

便りで『礎山が胃癌で一月五日に鳥取市の、

生協病院へ入院して、十三日に癌の切開手術

を受けましたが、手術後も尚痛みが続いてお

ります。貴方様に逢いたくて夢にまで見たと

申しております。もっと早くお知らせすべき

でしたが、何かと取りまされ今日まで延引し

ましたことを、何卒お許し下さいませ。」

とのお便りで、礎山さんの病気を知った。

川柳塔誌の句から病気ではないかと思ってい

たが、まさかあんなにも頑健だった礎山さん

が胃癌なんかならうとは想像もつかなかっ

た。佳女さんのお便りに接した一月二十一日

の午後、鳥取市の病院に見舞ったが、その時

「笑いを傷つけるものは多くはへたな技巧で
あろうかと思う」

「作句もこんな工合に急所を衝いて詠まれる

と文句のつけようがない」

「家のまわりには風のみちというものがあり

それを離れると風鈴は鳴らぬ 要領のいい人

は少しばかり風の路を外らして吊る」

「句というものは 十七字の定型がどうの

字余りがいいとか わるいとか さては俳句

ではどうの 川柳ではどうのと妄りに論すべ

きものではない 要はその句にあるのだ」

梅志さん あなたは

何もかも知り尽した人でした

川柳家梅志語録を読み給え

梅志さん さようなら

藻 介

はまだ話しも出来たし、意識もしっかりして

いて、色々と川柳のことを話したが、本

人も胃癌であることを知っていて、俺れの命

も後一カ月とはもたんだらう」と平然として

言っておられたが、礎山さんの気持の強さに

今さらながら驚かされたものであった。

礎山さんの柳歴はそう古い方ではなかった

が、川柳に対する情熱はすばらしいものがあ

った。昭和四十一年八月、不二田一三夫氏と

私が推薦して川柳塔の同人になつてもらっ

た。同人になられてからの礎山さんの活躍は

たいしたもので、我々川柳人は驚嘆させられ

たものである。川柳の道にいそむ者の幸福

を常に謳歌して、新人の育成に力をそそぎ、

自から「ふじかげ短詩睡会」を組織し、小・

春は大萬川柳から

— 遠来の柳人どっとご出席 —



故松江梅里氏宅を会場にして、本年も大萬川柳から春をよぶ。

六十一名のご出席のなかには、岐阜から鱈魚、芳博、恵子氏、倉敷から好啓、克枝氏、米子から瑞枝、千代氏という遠来組。

好郎一門の同人が十数名、例年のように応援に駆けつけ、サービスに大わらわである。かてて川柳塔首脳部総出席という豪華版は、大萬川柳ならではのものです。

生々庵主幹の柳話を幕あきに、ここにくりひろげられる柳人図絵は、川柳塔独得の和のムードがいっぱい。

会場内の故梅里氏の遺影も心なしかほほえむようである。

名司会西尾榮氏が祝電を読みますと、声高らかに発信者を紹介される。

路郎・豆秋・梅里・柄井川柳——文蝶は来ていないが二日酔いやろ——と。

「名司会」という声がとぶ。各選手もひと言ずつ梅里さんへのび、そこに、やはり梅里さんは生きている。

懇親宴になると、さらに榮氏は本領を発揮

中学生までも川柳を教えて、川柳の発展に活動されたことは皆様も御承知のことと思います。

いちど鳥取市のお宅を訪問したことがあったが、礎山さんは、短歌、俳句、それに詩については相当古い経験の持主であることを知らされた。その時、二十余年も作詩された記録を原稿用紙に書いた綴が何十冊と本棚にさられていたことを今でも覚えていた。

礎山さんの短詩文学に対する情熱は本当に計り知れぬものがあつたように思う。

又川柳塔の柳界展望欄でも紹介されていたが、身体障害者援助のために県下の柳友に呼びかけて色紙、短冊展を開催されたこともあった。私の家にも一二度、来訪されたことがあったが、年下の私を「先生」と呼ばれるので、何んだかこそばゆい気がしていたが、これも礎山さんの人柄の良さだったと今でも思っている。

元海軍の将校で特攻隊の生残りの勇士だった、ファイトマンの礎山さんがこんなにも、あつてなく逝ってしまったとは、実になんともやりきれない気持で一ぱいである。

礎山抄

すだれ越しの声伴せに満ちあふれ
教え子の涙を誘う暑の見舞い
利用価値まだあるらしい見舞われ
御近所の計算通り暮ししたし
ほっとした唄が出ていた台所
薬飲む為の目醒しさみし過ぎ

して、かくし芸大会のエンジンとなり、閉会後の別れが名残りおしかった。また、ここでお逢いしましょう。(三才と軸吟だけ発表)

第十七回大萬川柳大会

兼題「大志」

本多柳志選

大志今日女をつれてころげ込み
東京に染って大志向きを変え
大望も妻に小さく養われ
打ち明けてみせて大志の高が知れ

草 春
静 馬
慶之助

兼題「好き」

好郎代選 菊沢小松園選

押し花を封じ好きとは書いてない
好きだったことをお墓へ申しあげ
好きな人出来て三毛猫はつとかれ
惚れてても好きとは言わぬ意地を持ち

好 啓
一三夫
大吉

兼題「珍客」

正本水客選

珍客にあの時の子を引き合せ
生きていた事から話す客が来る
珍客は二度目の妻に気がつかず
冷戦中とわかり珍客笑うてくれ

青 香
鱗 魚
静 馬

兼題「微笑」

河内天笑選

ほほえみをかくして親の顔になり
返品客にも微笑忘れてず
国柄が違い微笑が誤解され
無理をして笑うたあとが続かない

小松園
瑞 枝
青 香

兼題「枝」

林 瑞枝選

妥協なき枝は伐られる運命もつ

白 柳

武蔵野の枝の交差に詩があり
一枝に季節の花がある飯場

兼題「小銭」

小路代選

岡橋宣介選

チリリンと庶民の音で小銭落ち
日掛銭障子の棧に農家留守
銀行に一銭を合わす灯が残り
小銭入れときちようめんであった母

大 吉
瑞 枝
一二三

兼題「克己」

小野克枝選

どん底をようやく抜けて今日を生き
中卒が萬という字を為替組む
我をころし合つて夫婦は埋ずめ合う
誘惑に負けまいとする子の寝顔

狂 二
栗 魚

席題「鯛」

市川鱗魚選

見て戻るだけに終った桜鯛
高値呼ぶさんまへ王座ゆらく鯛
吉日を知らず水族館の鯛
渦汐のこぶ長生きをしてる鯛

鉄 兎
恵 子
花 梢

席題「千円」

八木千代選

千円のことで職人引き抜かれ
玉垣は金千円の筆がしら
一泊千円ランプの良さを嘔みしめる

席題「花束」

藤岡花梢選

良心に逆う花束持たされる
花束を持って女の欲が増え
花束へ白い手袋ためらわず
花束にまだ実感の湧かぬ顔

小松園
鱗 魚
白 柳

さんづけを燃えてる女気にくわず
佳き日なり暑い空気の味もほめ
ブライドをすててからある平和な日
生き甲斐は慕つて呉れる人があり

礎山最後の手記

藤本佳女

院長から与えられた命数の裡の一日を己が魂でじつと見詰めているとき、こんなにも素晴らしい一日一日が五十九年生き伸びた過去の人生に、どうしてもあったとは思えない。生も死も想わず常に己に残る命数の一日一日をじつと視ているとき、人生の喜怒哀衰をとり越した、それへの愛着がすっかり消えてしまつて、私のわずかな命数に来るべき損得を目ざし、目を皿のように輝やかせ馳けずりまわり、右往左往する人達、それをわずかの余命を通じて、じつと静かに見つめている私の何と偉大であつたことか、こんなにも素晴らしい人生があつたと云う事を、かつての誰が気がついたものがあるろうか。余命わずか日々に私は自分の人生をこんなにも素晴らしいものにしたい想いも依らぬ裕と和を、私と家族達は進んでゆけるのだ。ああ素晴しかった私の人生。

失敗

臼井 三林坊 選

再起する日の失敗へ目をつむり
 受驗失敗父はそうかと云つただけ
 失敗を失敗談でなくさめる
 失敗を許す男の にかい過去
 失敗へ故郷の山河遠ざかり
 失敗の娘へ婚約が決まりそう
 勇み足失敗なんか氣にかけず
 俺に似た失敗語る汽車の客
 失敗を詫び少年工の目が素直
 失敗をしてから父も少し折れ
 大物の失敗アツハツハと笑い
 少年工の失敗とがめまいとがめ
 失敗へくよくよ出来ぬ子の寝顔
 失敗を笑うて 倫す年となり
 失敗を恐れて 男名を成さず
 失敗をしたか住所も知れずなり
 失敗を白状させる 酒を注ぎ
 失敗をクレパス口を開けて待ち
 徹夜した山が外れた答案紙
 失敗をやんわり包むアルコール
 失敗を妻の笑顔が受けとめる

扇 水 同 明 枝 初 宵 青 近 里 曉 保 鶴 素 英 伶 松 国 巴 利 竹 正
 朗 馬 美 彦 花 彦 人 子 郎 丸 身 郎 夫 風 風 江 夜 明 市 枝 初 宵 青 近 里 曉 保 鶴 素 英 伶 松 国 巴 利 竹 正

失敗を励ます強い男の手
 失敗をかばうて 帰り道の月
 失敗にならぬ様試案の二つ三つ
 失敗と知りつつ意地が目をつむる
 失敗を遠巻きにして世間の眼
 失敗もあり人情の奥を知り
 内の浦五度の失敗意に留めず
 失敗へ昨日の事は云わずおく
 失敗の連続人生 黄昏がれる
 失敗を恐れなんにもせずにいる
 失敗の流れに強く石投げる
 失敗のこつもきれいなエピソード
 失敗をして男に酒があり
 失敗に馴れて女はもう泣かず
 失敗と思わぬ馴れが恐ろしい
 失敗を軽く見過す 腹が出来
 失敗の云える 面魂に惚れ
 失敗の責を左遷の荷にまため
 失敗へ元氣を出せと空があり
 失敗をぶつつけに行く コップ酒
 言訳をすれば 惨めな我一人

一 柳 隆 正 仲 木 秋 肖 七 一 静 露 雅 一 秀 千 代 芳 芳 孜 我 一 古 方 天
 陽 來 福 失 敗 の 手 順 も な つ か し い

又元の姓にもどつたミシン踏む 南 峯
 失敗を許さぬメスが生きている

ゴルフ

浅野 芳朗 選

上役へ趣味を合わせに行くゴルフ
 ゴルフアーのみな達人という構え
 アリバイになる顔を出すゴルフ場
 日曜はゴルフと洒落て見直され
 買出しとゴルフバッグで始発出る
 妻の見栄夫のゴルフから話し
 生活をかけてゴルフの球ひろい
 ゴルフ焼腕の程度はブービー賞
 ハンディを笑いにばかす応接間
 ほどほどにゴルフお得意さま相手
 こんな所にこんな日本のゴルフ場
 ゴルフする時間はとつてある会議
 営業用ゴルフへ負けるテクニク
 金があり暇が有りしてゴルフ狂
 ゴルフ場俺もあいつも社用族
 ゴルフボール空の碧さへ叩き込み
 ゴルフ場へ田舎の道が立派すぎ
 ゴルフする息子が自慢故郷の母

扇 水 同 明 枝 初 宵 青 近 里 曉 保 鶴 素 英 伶 松 国 巴 利 竹 正
 朗 馬 美 彦 花 彦 人 子 郎 丸 身 郎 夫 風 風 江 夜 明 市 枝 初 宵 青 近 里 曉 保 鶴 素 英 伶 松 国 巴 利 竹 正

ゴルフまで上手になって嫁かず
晴ればれとゴルフ日和の家族づれ
ある時は芋も作ったゴルフ場
クラブ振るポーズとつてる昼休み
商談もゴルフがプラスする時世
ゴルフ場整地縁なき者の汗
角おちのようにハンディ決めらる
ゴルフ場出来て農道舗装され
ゴルフ場を追いかけてる社の電話
ゴルフ狂エリート意識のナンセンス
億のつく談話がはずむゴルフ場
ゴルフ場キャディに長い日がくる
今日からは社用ゴルフもなく停退
ゴルフでもと来ましようと思出し
店長の代理ゴルフでカップ受け
ゴルフカップ飾った部屋でも自慢
ゴルフ族になって肩身の広い顔
生活の外でゴルフの汗をかき

天
ゴルフ焼けて月曜の社長室 静歩

ひいき目に見ても長男頼りなし
処世術みな長男に逆わず
親思いだから長男縁遠いきよ
長男と腕角力とり未だ敗けず
敗戦の芋飯長男だけが知り
長男という宿命の鉄にぎる
長男にだけ言つとく事が茶の間
長男と長男同士馬が合い
ハンサムな長男もてて親なやみ
なき父に似る長男の頼もしく
長男に生れ出稼ぎにも出かけ
長男も次男も当てにはせぬ貯金
封建の壁へ長男挑戦し

長男

太田良子選

長男の嫁で云いたい事ばかり
成人の長男だけ知る父の顔
長男に取り巻き多いかたみ分け
長男に欲しい末子の胆っ玉
長男も次男も家業にそっぽむき
長男と言うつき合の金が要り
財もなかった長男に済めぬだけ
長男は専務といふ名でただ置かれ
長男に頼るに少しもの足りず
長男に見果てぬ夢を託すとし
年をとる程長男は亡父に似る
長男が出来て姉婿邪魔にされ
がめつさがも一つ長男欲しいなり
長男の威勢を示す鯉職
長男を国に捧げて貧に生き
財産が無くて相続無事に済み
長男の無口が母に頼もしい
長男の不出来に過ぎた嫁で無事
長男に教育ママが裏切られ

長男の嫁で云いたい事ばかり
成人の長男だけ知る父の顔
長男に取り巻き多いかたみ分け
長男に欲しい末子の胆っ玉
長男も次男も家業にそっぽむき
長男と言うつき合の金が要り
財もなかった長男に済めぬだけ
長男は専務といふ名でただ置かれ
長男に頼るに少しもの足りず
長男に見果てぬ夢を託すとし
年をとる程長男は亡父に似る
長男が出来て姉婿邪魔にされ
がめつさがも一つ長男欲しいなり
長男の威勢を示す鯉職
長男を国に捧げて貧に生き
財産が無くて相続無事に済み
長男の無口が母に頼もしい
長男の不出来に過ぎた嫁で無事
長男に教育ママが裏切られ

自主性のない長男に育てられ
後とりだからと厳しく育て過ぎ
長男の事には祖父母口を出し
父に似て長男そろそろ禿げかかり
長男が明治の父をはがゆかり

住

住

住

住

ゴルフ場こんなに歩く足を持ち
人の世はゴルフする人かつぐ人
夕陽いまキャディ労わるるに落ち
ぜいたくな汗ゴルフ場に流される

長男の出来て姉婿邪魔にされ
がめつさがも一つ長男欲しいなり
長男の威勢を示す鯉職
長男を国に捧げて貧に生き
財産が無くて相続無事に済み
長男の無口が母に頼もしい
長男の不出来に過ぎた嫁で無事
長男に教育ママが裏切られ

別居なら長男でよい嫁が来る
長男の嫁で家風を意識する
次男から手直しをする育児法
和服が似合う長男で左り前

人

人

人

人

健康にゴルフがよいと言える地位
小人招待ゴルフになれて居る

長男の不出来に過ぎた嫁で無事
長男に教育ママが裏切られ

次男から手直しをする育児法
和服が似合う長男で左り前

地

地

地

地

初歩教室

— 題「花」 —

本田恵二朗

テレビのプロボクシングを、絶対に見逃がさぬという習慣を持つている私であるが、ただ漫然と見ているだけではなく、幾分のプラスを見つけ出そうという魂胆まで持っているのだから、あきれたものである。

その幾分のプラスの中に、こんなのがあつた。やたらに気負い立って、長いリーチを、振り回すが、一向にヒットしないばかりか、スタミナの消耗に拍車をかけているのがある。落着きのあるモーションで、リズムカルなジャブを、間断なく振り続けて、適確にポイントを挙げるのがある。

前者と後者のどちらが好ましいかは、解明するまでもあるまい。川柳人である私は、この状態を、作句態度に当てはめて見るのであるが、近來、前者に属すると思える川柳人を見受けることしきりである。私は勿論、後者を推すものであり、私自身も、そうありたいと希い且つ努力している。ちよつぱりと、私

の主張を披瀝したが、さてこんどは皆さんの熱吟と四つに組んで、一と汗かくとしよう。

野点よし花ほろほると媚びてくれ 静観堂

熱心な作句態度と共に作句を楽しんでいる。手さぐりに色無き花の香と遊ぶ 正朗

盲目の人の詩情が、ぐつと私の胸にせまる。花がある足音がある明日がある 凡九郎

希望に燃える春、若々しい呼吸が聞えるよ。二分咲きの梅北風にさいなまれ 孝華

活け終えし心静かなひとときよ 同

川柳への意欲がもえ上ろうとしているよ。妻の座の苦勞満開にいたわられ 芳子

こんなひとときを神は与えてくれるのだよ。ステージ一杯造花のように歌手並ぶ 正夫

カラーテレビで毎度見る姿だ。造花とはよし言い負けて心貧しき花を活け 洋々

この調子だよ。一連の句ともによかつたよ。花の無い花瓶見つめている空虚 肖二

今月は上出来。このペースで突進だ。物別れ床の椿がぼとりと落ち 新之助

一連の句の中に、この一句が輝いているよ。春霞たつぷり吸うて花開く 綾女

花咲く姿を川柳人はこんな見たかをするから楽しくなる。この調子を忘れたもうなよ。やりくりの末の花見へ雨が降り 止水

お気の毒さまだがアンタ孫男かも知れぬぞ。花びらを糸に通して孫が見えるよ。大吉

爺ちゃんの目を細めた顔が見えるよ。ハイミスの不気嫌花瓶をおのかせ 保夫

今が花たんとわがまま言いなはれ 茂美

親こころはやりわりと温いものだよ。語言葉のままで叙して、一層に効果的にしたよ。

昔昔花恥しという語あり 静子

あつたあつた確かにあつたよ。なつかしいではないか。それにしても現代娘の活潑なと、中にはゲバ棒など振るものがあるよ。

過去秘めた過去は何んであろう。そんなこと言うのは野暮というものだよ。比呂路

花びらになつて散るしかないさだめ 克枝

はかなき女の人生よ！などと私は言わない。花びらだつて、可愛いし、美しい。私はどうやらフェミニストらしいぞ。

一鉢の花に四季あり2DK 和風

2DKといえども我が城である。昔の奴はうまいことを言つたよ。狭いながらも、とね。老松を活けて心の花とする 初甫

淡く枯れた味だ。年輪は尊いものだよ。花も実もあつてその上金もあり 露杖

羨ましき限りの人間像を画いて見せよ。たがため満開あわれ過疎の里 孜孝

だれにも觀賞して頂かなくても、咲かずにはいられない。花は正直で、純真である。自己流でよし花活ける幸をもち 一二三

そうだよ、自己流でよいのだ。川柳の花だつて自己流でいいよ。進歩的自己流であれ。寒椿零下の風もなんのその 頼次

寒椿の美は、冴え切つた寒さの中にあつてこそ、可憐であり、美し且つ高貴だ。

花はめて片手に持てぬほど貴い 文子

はめるといふことは、マイナスにはならない

ものだよ。但しお世辞は頂けないがねえ。

花曇り水平線に船うごく 正直

素晴らしいスケッチだよ。私もその景色の中にいるような想いがする。

梅一輪咲いてわが城春にする すき

老梅だはまだまだ達者である。咲く時を決して忘れないで咲いてくれる。わが城への春の使者である。人生の幸はこんなところにもあるのだ。詩情を持ちあわせている者の幸だよ。

村中を活気づかせた梨の花 秋女

梨とこの喜びが目に見えるようだ。生活の資となってくれる色であり、丹精の花である。

脇役の緑へ花の色ゆえる 千代

緑したる葉を、脇役だと観て取ったのは、句主の主観だ。この感覚が、作句の要素だ。

休作田雑草おそろおそろ咲き 近江

休作されない頃は、芽を出しただけでも、むしろ取られていた雑草だ。咲かせるなど、もっての外のことであった。世の移りかは、休作という現象を呈すようになつて、雑草としてみると、妙なことになったものだ、おそろおそろ咲く。面白い句材をとらえたよ。

よそおえど心に花の咲かぬ日日 美代

心の花とは、よくぞ言つた。咲く日日なら、こんな句は生れなかつたかも知れぬ。

春うらら花に酔い人波に酔い 金三

春の魔力のとりこが、千鳥足で漫步する。私の旧作に『花の酔い時も所も子も忘れ』というのがあるよ。

花の雨雛菊ならぬ妻を連れ 利美

雛菊みたいな妻と、のろけたいところを、じ

つとこらえて、雛菊ならぬと謙遜なされた

花東が楽屋に届くほどになり 誓二

ご出世なされたものだ。でもここまで来るとは、血と汗の苦労と努力とがあつたのだ。

花の山大虎小虎放し飼ひ 慶彦

なんとも妙な放牧場だな。アルコール臭い呼吸に、満開が顔をしかめていいるではないか。

人間にだまされ温室派手に咲き 八郎

外では小雪が散っているというに、まんまとだまされて咲いているというに、まぶつぷり。

菜の花が日の丸弁当開かせる 露声

私の大好きな日の丸弁当だ。私は、日の丸弁当をはおばると童心にかえる習癖がある。

梅桜桃仲良うに咲いて土佐 勝子

南国土佐の景色を、まだ見ぬ人にさえ、想像させるであらう一句だ。私の長男は、高知県のある病院の医長をつとめている。可愛い孫も二人住んでいる。一度訪れたいものだ。

四月二十日締切題一雨―(六月号発表)

宛先、倉敷市下津井三五二七二一

本 田 恵 二 朗

ひと言

★

室山三柳

「外来語と日本語」(戸田古方氏)

この文中、旧陸軍ではシャツ・パッチを衣

袴(いこ)といつていたように書かれている

が、小生(終戦の年一年くりあげて入営)は

シャツを襦袢、パッチは袴下(こした)と教えられた。

「じゅばん」は「じばん」でもとポルトガル語。そこにおかしさを感じたものだった。

小さいことだが、軍隊を知らぬ人のために一言。

★

「雅号ぶつちやけばなし」ほか、いただいた原稿は、もうしばらくお待ちねがいます。(編集部)

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

大 萬 川 柳

「モデル」

入選発表

選 者 清水白柳
 投句総数 五百八十二句
 入 選 七十九句

実演のモデルにされて買わされる

大 阪 凡九郎

着こなしまではモデルのせいでき

羽田野 吐 来

芸術の名にあつさりとモデル脱ぐ

松 原 史 好

お役所の気休めというモデル地区

富田 林 美 代

新調がモデルのように舞うてみる

倉 吉 弘 朗

裸でも食えるモデルがうらやまれ

倉 敷 克 枝

モデルにもなると都会に吸い込ま

兵 庫 可 住

モデルチェンジ個性を少しすつ削り

高 槻 静 馬

モデル地区犬の散歩にコテが要り

堺 茂 美

モデル地区やつぱり同じゴミの山

化粧品客もモデルになる売場

小 松 弘 美

アトリエで脱いだアルバイト

倉 敷 恵二朗

恋愛のモデルケースでゴールイン

大 阪 野 迷 路

バリカンの腕をモデルに見直され

大 阪 柳 志

素裸で稼ぐモデルを羨やまれ

倉 敷 里 風

センセイを細う画いたら貼り出さ

堺 素 郎

見学と遊山に荒れたモデル都市

笠 岡 忠 三

着々と軍備完了プラモデル

八 尾 醉 々

舞妓はんモデルとしてもよう稼ぎ

大 阪 弘 生

モデル校野性美少い子に育て

大 洲 曉 風

パパの酒モデルにされた綴り方

大 阪 新 之 助

失敗がモデルケースで知れ渡り

大 阪 満 津 子

モデル業やめて腹一杯に食べ

小 松 魚 山

アトリエへ波紋を投げてモデル去り

米 子 千 代

うかうとモデルに似合う服を買い

倉 敷 春 日

末っ娘がモデルになると驚かせ

岐 阜 鱗 魚

芸術でうと無からと脱ぐモデル

高 石 好 郎

モデルハウス素う破抜く雨がもり

天 笑

画家のうぬべれがモデル又変える

大 阪 水 客

借り物を着こなす腕も元モデル

大 阪 水 客

遊ぶ金要るからモデルまだ止めず

大 阪 水 客

モデルコースに違和感もなく二人

堺 青 香

モデルシッポの下で夫婦は茶に坐る

堺 青 香

豪華ショーため息モデルにも聞え

堺 青 香

買う気ないモデル住宅見てまわり

堺 青 香

新薬のモデルケースとなる患者

堺 青 香

モデルチェンジしても客足減りしめ

鳥 取 秋 女

母さんを画く母さんにあるホクロ

鳥 取 秋 女

写生するモデルの猫がままならず

鳥 取 露 杖

口説く手の一つモデルになつてく

背を見せしモデルに妬心研ぎすます

大阪 滋雀

流行を着てもモデルのものでなし
似合わない罪はモデルに着せて

倉敷 千翁

モデル料下がる脂肪が付きはじめ
ねらわれるにモデルの線が伸び

倉敷 扇水

自信ある表情だけですむモデル

買わん気の瞳にはモデルが映らない

岡山 久米雄

小説のモデル養老院に住み

寝不足の肌だとモデル見抜かれる

岡山 康明

愛悲しモデルは顔をくずさない

素晴らしいモデルだ画布の幅がない

笠岡 要次

アトリエのモデルに妻が落ちつ

脱ぐものを脱いでモデルの顔にな

今治 宵明

許される限界モデルポーズとる

恋人が出来てモデルはもう脱が

過去云わず未来語らずモデル脱

堺 千万子

モデルさへうぬぼれと見るニュー

モデル嬢今日は自分のすかん服

それも重荷となったモデル地区

倉敷 素身郎

スードモデルに寝たきりの母が

颯爽とモデル微熱を押して立ち

モデルケースだけに一歩も引

佳句

堺 天笑

女子大に籍だけおいてあるモデル

大洲 曉明

補助金へよんどころないモデル地区

岡山 止水

グラビアの流行封話のないモデル

堺 素郎

パパ早う弁償してやプラモデル

岐阜 鱗魚

売れぬ絵のモデル女房を画きつ

人ノ句

岡山 止水

普段着にプライバシーがモデル

地ノ句

岡山 柳子

モデルにもむかず奥さんにもむか

天ノ句

尼崎 利美

先生をモデルに画けばママに似る

選者 吟

納税のモデルにされて顔が利き

四十五年度ベストテン (三月現在)

一 素郎

二 天笑

三 利美

四 吸江

五 千代

六 扇水

七 千翁

八 静馬

九 きさ子

十 素身郎

十一 恵二朗

十二 青香

十三 水客

十四 宵明

十五 ゆきを

十六 好郎

十七 鱗魚

十八 曉明

十九 康明

二〇 久米雄

二一 新之助

二二 可住

二三 史好

二四 金三

二五 日満

堺

堺

尼崎

藤井寺

米子

倉敷

倉敷

高槻

岸和田

倉敷

倉敷

堺

大阪

今治

宝塚

高石

岐阜

大洲

岡山

岡山

大阪

兵庫

松原

大阪

鳥取

八、五

七、五

七、〇

六、五

六、〇

六、〇

六、〇

六、〇

六、〇

五、五

五、〇

五、〇

五、〇

五、〇

五、〇

四、五

四、五

四、〇

四、〇

四、〇

四、〇

四、〇

四、〇

四、〇

四、〇

昭和四十五年度第五回

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスックス



積水化学

本社 大阪市北区宇野町1

投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五一六
郵便番号 五九二

川村 好郎

「良心」 五句以内

締切 四月二十日

第六回「天使」 五句以内

締切 五月二十日

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼川柳きやりの五十年史が磯部鈴波編で昭和四十五年四月一日発行になる。社人句集もあり、上製函入布十クロイ製、B6版、四百十頁実費千五百円、送料九十円。申し込みは東京都台東区入谷一ノ十四ノ六川柳きやり吟社。

▼岡山県下の川柳塔同人の懇親会が五月三日(日)午前十一時から岡山駅前三好野会館で開かれる。本社から、中島生々庵主幹をはじめ、好郎・多久志副理事長、白柳編集長ら顔を揃えて多数出席の予定で「塔」の兼題で作句を持ち寄ることになっている。

▼第六回大陸川柳作家同窓会が六月十四日(日)正午から十五日朝食後の解散まで、伊勢市内宮前神宮会館で開催。句会、討論会、懇親会などを持つ。一般川柳人も自由に参加出来ること

▼清水美江川柳文化賞受賞句「みつばち」出版記念祝賀句会は三月二十九日(日)午前十時から北浦和の埼玉県労働会館二階で開催。

▼札幌川柳社柳社賞が決定発表になった。

▼あかしや賞に畠沢笑花氏(札幌)「欲しいものならべて見れば先ず若き」

ぼぶら賞に阿部緑尖氏(美唄)「手鏡はずせば退屈そう

な手が二本」

札幌賞に田中忠幸氏(滝川)「身動きをすれば逃げ出

しそうな幸」

功労賞には、斎藤正人民

(流川)と中川ていさん

(札幌)が受賞された。

(札幌)が受賞された。

(札幌)が受賞された。

(札幌)が受賞された。

(札幌)が受賞された。

▼豊富川柳社創立記念兼宗谷夏季川柳大会は六月七日正午から天塩郡豊富町温泉町菅元湯館大広間で開催。兼題は、内緒・発展・冗談・錯覚・歓迎、各題三句、投句は二百円封入の上五月二日までに、北海道天塩郡豊富町東二の五・藤谷怠民愚方豊富川柳社宛。

▼愛知川柳作家協会第六回総会並びに川柳大会は五月十七日(日)正午から東別院青少年会館で開催。兼題

おかめ・仲よ・風・きら

句、投句は百円封入して名

古屋市中川区八幡町二の十

一・加藤彩華宛。

▼豊中川柳会春の句会は四月二十六日(日)年前十一

時から満願寺(阪急電車雲

雀丘花屋敷駅下車)へ吟行

会費五百円(軽食付)、兼

会、まずまず、ながめ、ほ

がらか・夢・よいわんわ

参加申込みは四月二十日ま

で、豊中市蛸池中町三の三

・中央公民館へ。電話も

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

可、豊中局06815515五六

一。▼備前川柳社二月例会は横山一声銀婚記念を兼ねて十五日、一声居で開催、多数の柳友が一声氏を祝福した。

▼「月刊・自家用車」にC

A R柳壇が誕生。一般から

車やカー生活に関する川柳

を募集している。応募要項

は、ハガキ一枚に一句、住

所氏名年令職業を明記、毎

月十日締め切り、二ヵ月後

の誌上に発表。特選一名十

五名、記念品、年間を通じて

全応募者から抽選で十名に

特製記念品を贈呈、送り先

きは東京都台東区東上野二

の十四の十八、内外出版社

月刊自家用車編集部C A R

柳壇係。

▼川柳互版二月号に掲載の

「よみうり川柳賞」に、シ

ョクリハイラスアブナイシ

ゴトスナ―奥田基手朗の

句があり、評に「電文にし

た思いつきが秀逸」とある

▼第二十回主流賞・準主流

賞に、香川水声氏の「就職

疲労
肩こり
神経痛
食欲不振

アリナミンA



14

吉備団子

二〇集

定価五〇〇円 (千一二円)

岡山市津島二五四一 川柳岡山社

列車に手を振り墓に水たぷりとやる。「画布一ぱいに枯野を描いて旅に出る」句がそれぞれ受賞になった。「主流」は口語俳句誌だが主流賞の選に、岡橋宣介、河野春三、山村祐、松本芳味の川柳家諸氏が加わっておられる。

▼西尾榮氏(八尾市同人)は三月七日から三泊四日です房総半島、犬吠岬の旅を楽しまれた。九日には鴨川グランドホテルで、皇太子殿下ご夫妻と礼の宮様を立礼でお迎えされたが、旅の印

象の最も深いものとなった由。

「殿下迎える姿勢で風邪をひき」

▼月原宵明氏（今治市）は大坂へ出張、道路公団、住宅公団、日建設計へと廻って一日を消費、連絡最終便にぎりぎり、一度川柳塔社へ立ち寄りたい志を今回も遂げられずに残念のと。二月十一日には伍健まつり句会で米沢暁明氏と飲談された。

▼若柳潮花氏（高橋市同人）は二月十一日、三越劇場での「若柳千洗舞踊の会」に

出演「外記猿」を舞われた。

▼山内静水氏（竹原市同人）はご子息の静雨氏の結婚、その記念句会の準備、職場の仕事で忙殺「私のうちに娘が一人増える。慕われるよい父にならなれ」と。わが家に春が来た来た娘を迎え。

▼河村日満氏（鳥取市同人）は所用のため、最近鳥取・下関の間を走り廻ることになりました。

▼鈴木可香氏（名古屋市）は三月二日、二女三女の二人の令嬢同伴で勝浦温泉に遊ばれた。

新同人紹介

林

快夢起・多志推薦
蒼蛇楼

岩

久志良・白柳推薦
二三枝

りにけり―旅風。

▼藤田軒太楼氏（島根県）は十年近い宿病の胃潰瘍を手術、二月十七日無事退院自宅療養を続け、八キロ減った体力の回復に専心しておられる。

▼田中好啓氏（倉敷市）八木千代さん（米子市同人）林瑞枝さん（米子市同人）小野克枝さん（倉敷市同人）から大万川柳会での楽しかったこと、大阪の柳友の温かく親切だったことのお礼状を沢山頂戴しました。またの機会に再会をお約束しましょう。

▼堤八郎著句集「紫雲台」が昭和四十五年一月十九日発行、久留米建設機械専門学校校長の職にある著者が還暦に頭の切りかえの意味で刊行に踏切った。久留米市長、ブリヂストン初代社長、前衆院議長らの序や祝詞がある。B6版二百二十六頁、美本。非売品。あなた百までとお屠蘇が盛りあがり

男心ぐつとこらえた今日の阿蘇句の他に随想、評論がある。

▼川岡靈眼子氏（諫早市同人）が主宰する諫早川柳会

が二月一日諫早市公民館で開催。八十余名の盛会。靈眼子氏は選考として出席。

▼森井普居氏（竹原市同人）三月四日二女出生、おめでとう。

▼尼緑之助氏（出雲市同人）島根県の最西端益田市に川柳開発した杉本寿恵吉氏へ久家代仕男本社同人が協力するため緑之助氏も指導にあたっておられる。益田市は徳川夢声の出身地。

▼清水一保氏（鳥取市同人）は三月九日、市議当選御礼の巡拝に小松島へ―霊場の鏡の余いんがまだ残り―

保。

▼不二田一三夫氏の漫才が数年ぶりで朝日テレビの「トップ寄席」から、お浜・小浜、はんにゃ・けんじ出演のもの四月に放映。また発行部数十万という「P L 婦人」誌に、標語と人妻（読売テレビ副理事）を、高鷲垂鈍氏が嫁約され大坂形水氏とも交友関係のある方である。

▼観桜川柳大会（むらくも川柳会）が四月十二日開催。大阪から多数出席される。

お買物は 明るく楽しい
ハンシンへ！



阪神

大阪梅田
水曜定休 電大阪 361-1201 (代)

本社 三月句会

会場 以和貴荘
六日 午後六時

万博景氣と句会は別もの、ちよつとさびしい出席率だが、雑誌のおくれたことも原因しているようである。川柳塔社はじまつていい、句会に雑誌がないことは、まことに申しわけない。

柳話には、初のご登場である八木摩天郎氏が、堺の人といわれる天野屋利兵衛をめぐる赤穂義士をテーマに、古川柳から現代川柳の義士を詠んだ句を朗読して、大きな感銘を与えられた。

十二月句会には、この続篇を拝聴したいものである。氏の説では、気骨こそ堺商人らしいが、利兵衛は京都の人ではないかと云う。利兵衛の兄が京都で呉服屋をしているなど、史実にもとづく話だけに興味深かった。

三月句会の月間賞は清水白柳氏。久しぶりの水谷竹荘氏のご出席もあり、鳥が辻川柳会の復活など、四月句会がたのしみである。

(F)
(河井庸佑整理)

出席―生々庵・飄太・肖二・儀一・新之助
・一舟・双葉・摩天郎・誓二・言也・一三夫
・花梢・維久子・柳志・綾女・庸佑・鶴声・
古方・一治・静馬・圭井堂・形水・トメ子・
酔々・凡九郎・千万里・いさむ・つき子・美
代・水客・鬼遊・一二三・好郎・白柳・章・
大吉・たかし・竹荘・与呂志・千梢・薰風・
季賛・宣介・恒明・多久志・柳宏子・万的・
薬子

席題「薬局」

水谷 竹荘選

薬局は利潤の良いのを先ずすすめ 綾女
広告の薬で薬局伸び縮み 双葉
薬局に相談しろは母の知恵 生々庵
薬局の知恵借り自分を慰める 水客
薬局の世話にならずに山が好き 凡吉
改造の薬局知らぬ間に儲け 肖二
漢薬もあります薬局如才なし 恒明
恥しい薬も薬局如才なし 生々庵
薬局に用事の多い子沢山 綾女
調剤を見事に捌く分包機 綾女
薬局で睡眠薬をうたぐられ 宣介
言いにくい病氣薬局目でさとり 一舟
盛り場の薬局ゴムで儲けてる 静馬
薬局で薬品株の話聞く 美代
値の高い方を薬局説明し 酔々
薬局で立ち飲みしてるスタミナ剤 新之助

直原玉青著

創元社出版
価 二千元

「新しい南画と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

薬局で照れるけれども避妊薬 誓二
薬局へ先生自ら処方箋 誓二
薬局の処方箋を医師に見せ たち
処方箋薬局眼鏡かけ直し 柳宏子
薬局の主人もきつい風邪の咳 花梢
薬局は医者より治るくすりあり トメ子
お医者さんほど薬局に尋ねられ 言也
効能書き通り薬局説明す 形水
薬局へおまけ目当の子の使い 綾女
避妊具はこれくださいでわかる位置 好郎
薬局のすすめるままに買うてのむ 庸佑
薬局で買った薬の方が効き 肖二
正直に言うて薬局ひまが要り 白柳
もう先の短か父の薬瓶 摩天郎
薬局で読めぬ処方方の薬買い 儀一
言いにくく薬局ひまになるを待ち 一舟
薬局で医者の不信をぶちまける 水客
スーパーにある薬局で安く買い 言也
コマージュルきいたか薬局忙しい 千万里

漢藥のブーム 薬局見逃さず 一舟
 利き過ぎぬように 薬局氣を使い 大吉
 薬局へ来てから 藥の名を忘れ 一三夫
 藥局の秘藥のピラに 立ち止まる 肖二
 お大事にとは 藥局のエチケット 柳志
 化粧品の方に 藥局力入れ 恒明
 藥局は皆 強力をつけて 売り 竹莊

席題「ボンコツ」 岡橋 宣介選

ボンコツのパス塗りかてマイホーム 静馬
 ボンコツの山へ野良犬足を挙げ 綾女
 ボンコツになつても法規よく守り 一治
 氣安めの針ボンコツへ射つてくれ 鬼遊
 ボンコツでこんなわがままおまへんか 静馬
 一旦停車したら動かぬボンコツ車 柳志
 ボンコツにせずに残してじやまに 維久子
 ドライブインの度にボンコツ水を 柳志
 ボンコツ車買手つくまで磨きあげ 生々庵
 ボンコツに成つて歩巾を加減する 与呂志
 ボンコツは医師の知らない事も聞き 一二三
 ボンコツが生き字引きと引き出さ 一三夫
 ボンコツの暮しに和む老夫婦 一治
 大物のボンコツ座の場所がない 千万子
 まだ役に立つかボンコツいたわれ 与呂志
 ハイウェイ避けてボンコツ恙なし 静馬
 ボンコツの誇り妻子を乗せて来た 好郎
 魚市場朝の仕入れにボンコツ車 双楽
 ハンドルの妻がたしかなボンコツ車 好郎

席題「交差点」 城 一舟選

その人が使えばボンコツ生きて来る 美代
 何時見てもボンコツ山は雨ざらし 肖二
 傾いたままボンコツがある堤 白柳
 転宅の荷にボンコツの三輪車 花梢
 ボンコツの山見てドライブから帰り 宣介

北風へ待つ位置変える交差点 鬼遊
 シグナルのない人生の交差点 美代
 交差点回れ右した屋台の灯 千万子
 とまかくも走つて渡る交差点 好郎
 交差点また労組のピラがふえ 一二三
 交差点妻と荷物を持ち変える 生々庵
 人間無視渡るとこない交差点 白柳
 やっかいな人に出逢つた交差点 つき子
 交差点犬が小便又おくれ 儀一
 交差点人は上へと邪魔にされ 凡吉
 交差点知らない顔がハナにくる 花梢
 僕の人生交差点が多すぎる 一二三
 交差点のたばこ屋まではすぐわかり 静馬
 方角をたしかめに立つ交差点 花梢
 交差点立体交差に空へのび 柳宏子
 新メーター交差点の数かぞえ 酔々
 もうなかつてものに交差点手を引 千梢
 右折する自動車へ人が止まらされ 凡九郎
 行き先きを手まねでして交差点 圭井堂
 手をあげた園児の後を交差点 双楽

交差点「一秒待て」に教えられ 誓二
 交差点渡らず待つて顔なじみ 生々庵
 蝶の舞う花園が有りロータリー 大吉
 ボリスにも誇りがあつて交差点 柳志
 陸橋か地下を渡れと交差点 失名
 懷ろにゆとり信号一つ待ち 一舟

刊 月 川柳平安

清新で意欲的な編集と、遅刊のない確実な発行で全国から高く評価されている不偏不党の総合的な柳誌です。あなたの川柳の良き伴侶としてぜひご購読ください。

誌代 半年分 金五百円
 (旧号見本贈呈)

604 京都市中京区姉小路通

柳馬場西入

平安川 柳社

振替京都七六五番

席題「白紙」

傍島 静馬選

白紙に戻しても心はもどらない
抵抗のつもり白紙で出す賛否
委任状白紙がわなと気が付かず
我が色に染まる白紙のような君
判押して白紙委任を気にし出し
白紙とは男を捨てた言葉です
原稿は白紙のまんま夜が白み
ひとことが過ぎて白紙にしてくれず
悩む日が続く白紙の日記帳
答案が白紙のままでベルが鳴り
何やらが隠してあるような白い紙
クレオンの夢を育てている白紙
点一劃白紙におどる筆さばき
この話白紙にもどすに骨が折れ
天勝の紙一枚へ目を集め
子までなし今更白紙にも出来ず
親子でも白紙に戻せぬ程にもめ
銀行だから白紙に判を押して出し
問題を白紙に戻し練り直す
障子の白も春の動きを知っている
男を下げたけど白紙にしてみらい
下手くそな筆へ白紙は目をつむり
どっちでもよいから白紙で任せとく
紙振って見たけどオタメ出てこない
静馬

兼題「文才」

橘高 薫風選

文才もあって銀座のママ人気 野迷路

文才はなくても趣味へ書き続け
文才が有って家捨て親を捨て
文才は無いが心に通う文
社長より文才ペンネームで知られ
文才は時候見舞も書かされる
文才を自負素晴らしい嘘も書き
文才のある女房の走り書き
文才も理由の一つ離婚され
結局は代筆だけの文才よ
誤字だらけでも文才を自負して
ラブレターむずかしすぎて近寄れず
近所では文才かわりものにされ
文才があり囑託で息つなぎ
文才がなまじあるので無職なり
入試受験文才だけではごまかせず
人生を中途半バにした文才
文才があるばかりに庶務で老い
筆で食う自信が人に妥協せず
文才があり俯向いて歩きがち
社用誌へ専務随筆見直され
弁十郎ばりに恋文頼まれる
作文が上手出世をしそうな児
文才が世襲の暖簾捨てさせる
芥川賞へ文才まだ遠し
大器晚成文才はあわてない
文才をやつとスラムで認められ
文才に雅号をつけて欲もなし
文才の佳人男を敵にする
芳子
正朗
どなた
章雅
軒太
扇水
水客
酔々
つき子
白柳
一舟
摩太郎
一舟
一三夫
生々庵
形水
形水
水客
宣介
柳志
鬼遊
宣介
綾女
言也
つき子
静馬
一治
肖二

兼題「ジレンマ」

戸田 古方選

ジレンマを気にせぬ子へと子を育て
ジレンマにおちても女強いのもの
妻に活入れられジレンマ目がさめた
わが不徳攻めずジレンマへのあせり
ジレンマは逃がれ悔恨にひき籠る
ジレンマを解かしてくれぬ美酒美食
ゲバ棒も石にもジレンマ慣らされる
ある日の鈴は鳴るまいとして
青夜
祥月
正朗
芳子
軒太
一舟
つき子
水客

いささかの文才があり故郷を出ず
文才があればと思う四十坂
水客
薫風



磨かれた伝統の味

司子系御

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

若本多久志著

「親いころ・子心」

実費二〇〇円 送料六五円

「老いの坂」

実費四五〇円 送料七〇円

ジレンマの中に愛あるすばらしき 与呂志
ジレンマにやさしく子等が話しかけ 凡吉
所詮ジレンマ人間だんが欲だんが 凡九郎
朝の陽を受けてジレンマはつとす 白柳
ジレンマに便乗してゐるはしこ酒 美代
ジレンマになつてだんだんかしこ 庸佑
ぜいたくなジレンマですともやまれ 一舟
ジレンマの当り所に妻が居る 柳宏子
決断へ飲みジレンマのままつぶれ 儀一
ジレンマの言い分も聞く役になり 季賛
背に腹を交えてジレンマ共稼ぎ 生々庵
ジレンマが結局話まじめ上げ 季賛
ぬぎすてたポケットに両手入れた日 千万子
値上げ予告して新聞の物価論 柳志
反則へまだチャンピオン怒らない 扇水
ジレンマが却つて二人を近づける たかし
出来過ぎる連れ子へ義父の板ばさみ 圭井堂
ジレンマにかかり奉仕が行き詰る トメ子
雪の日のジレンマ白い影が欲し 水客
ジレンマが両手の花をとり逃がし 生々庵

ジレンマがあるから進歩と調和です 古方

兼題「焼け石」

若本多久志選

焼け石に水を分けてる赤い羽根 酔々
飯盒の跡が残っている河原 圭井堂
焼け石に水ビアフラへやるカンパ 柳志
燃えつきた名所に焼け石だけ残り 竹荘
焼け石は火口が近い道しるべ 生々庵
焼け石の残る栄華の跡わびし 大吉
焼け石に水と高利はふてぶてし 鶴声
釣りたての鮎が焼かれた石のいろ 圭井堂
焼け石に水でも集金かけまわり 好郎
値上りへ減税などは追いつかず 失名
焼け石に水でもうれし娘の助け 一舟
焼け石へぼたたり土工の顔の汗 言也
子沢山おやつをかくす場所を替え 維久子
焼け石に所詮は添えぬ水であり 肖二
焼け石に水の減税恩に着せ 酔々
焼け石に水を集める社会鍋 柳志
原爆に焼けたと見えぬ石畳み 静馬
焼け石へ妻の苦面が足しになり 摩天郎
焼け石に水新国道は今日もマヒ 好郎
母情こまごま焼け石に水の金 一二三
焼け石へ家相が悪いと占師 千梢
焼け石に水ほどの金貸してくれ 鬼遊
我が余生焼け石のごと味けなき 双楽
焼け石に水とわかつている努力 与呂志
焼け石へ利息の高い金を借り 一三夫

焼け石に水でも補償恩に着せ 一舟
焼け石に水だが誠意買うてくれ 一三夫
焼け石と知りつつ株へ手を染める つき子
焼け石へ資金は銀行そっぽむき 芳子
焼け石に水でも笑顔の月給日 どんたく
焼け石に水だが誠意有難い 扇水
焼け石の下に人生ある湿り 凡吉
焼かれても焼かれても石焼き芋の石 生々庵
焼け石であわびを焼いて海女の屋 章雅
溶岩が泣き笑いして肌をよせ 古方
焼け石もテレる水着がすわりこみ 新之助
火事跡に焼け石だけ無表情 双楽
焼跡の石に立退き先を書き 大吉
老いらくの恋焼け石のように燃え 竹荘
訴える僧石仏となり燃えて 鬼遊
鮎を焼く石人間のエゴイズム 白柳
懐石料理へわからぬ味を褒め 多久志

季節料理・折詰

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 9184



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

モーターの朝モーターの音がする 水客
ふり出しへ戻るに見栄が邪魔をする 好郎
本人は風変わりとは思うてず 柳宏子
目を閉じてから占いを噛みくだく 白柳
挨拶もしない隣りの聞き合わせ 清人
ふり出しからやれと資金は出し渋り 静馬
挨拶がわりと下心が届き 君子
あいさつが不得手女房の尻につく あいき
挨拶で社へ毒づいている左遷 柳志
顔色も見て占い師物を云い 酔々
占って裏目裏目と出てしまい 静歩
余生いくばくあけぼのへ深呼吸 千梢
ふり出しは同じ上りは運次第 綾女
占いのトランプ恋の騎士が寝る 作二郎
あけぼのは遠く病人気が弱り 文秋
占いがまちまち家が建てられず 一舟
さりながらその振出しの重いこと 古方
うらめしい地球きっちり来る曙 凡九郎

振り出しにもどれば焦る事もなし 智子
あけぼのの海も祝うた大漁旗 滋雀
何も彼も振り出しですとサツの前 鶴声
あけぼのは美しかった宇宙服 金三
元日のあけぼの寝坊の癖断たん 喜風
風変わり同士で一派相通じ 双楽
挨拶は通訳せずとも手を握る 誓二
出すはなし堂々巡りでらちあかず 八郎
運勢も占って見る初詣 好一
誘惑に負けてはかない夜が白らむ 儀一
あけぼのの野道で地蔵の影をふむ 大吉
あけぼのの空スモッグよ寝坊せよ 頂留子
ウインクで済む挨拶を感じかれ 一栄
占うてホステスひいきの客を待つ 瑞枝
スラム街ここが好きだと辻易者 章雅
気休めの占い当ってからあわて 肖二
矢車の音あけぼのをもう目ざめ 葵水
占いのもう一言を待っている 虎城
玉造川柳会(大阪市) 西出一栄報
鍋料理あとおじやもおたのしみ 一栄
一家団らん箸がせわしい鍋料理 誓二
鍋料理地酒の美味さよるこばれ 恒明
暖冬異変さっぱりわやの鍋料理 天真
ふるりのカニで夕餉は鍋料理 貞山
弟子達の料理で囲むチャanko鍋 金三
てっちりの頬に寒風心地よく 肖二
アノラック湯気たつ鍋にもてなされ 六龍子
鍋料理親しい箸がからみ合い 柳志

帰省して妻子と和む鍋料理 清人
初日から補助椅子を出すよい出足 形水
出足から悪い予感にさいなまれ 綾女
よい出足福笹売りの声が酒れ 静馬
波に乗り出足なんかは考えず 八郎
裏街へ出足をさけて廻り道 竹青
セールスが自信をつけた日の出足 君子
解禁へ出足の揃うワカメ舟 章雅
ゲバに出る子の足止める涙声 智子
一寸来いに出足の鈍る社長室 滋雀
売出しへお客お客の下駄の音 雀踊子
負けん気でも途中で息が切れ 千葉
万博の宿は千里の娘にまかせ あいき
人類の進歩と調和でも儲け 古方
展望台も万博の前景気 一文
万博を見て長生きがしそうなり 舟
万博で片言英語も役に立ち 鶴声
万博浪速の姿変えてゆき 好一
万博の工事振子がせきたてる 儀一
万博へ来る親戚の指を折り 柳宏子
万博の夢一ぱいに花を生け 静歩
出稼ぎの身は万博を造るだけ 鬼遊
忘年会幹事になって酒の番 句念坊
逃げて来た唄と思えぬ忘年会 白柳
忘年会コアラの方にもある意見 虎城
忘年会渡り仲居と又出会い 葵水
新妻に済まぬ忘年会続き 富久一
何を忘る行きはんのか今日も忘年会 凡九郎

川柳たましま

水粉千翁報

体操の形で秋の蝶が死す 三林坊
 木枯らしよあまり揺るな残り柿 豊作
 原色の女は真夏の陽を好み 澄子
 水銀灯好きとは云えず明るすぎ 秀子
 花鉢多忙の隙を埋めて鳴り 八笑人
 分別のあるうち好きでない証拠 萬平
 波柿の修業裸でぶらさがり 朝二
 不景気になる記事立て読んで 安静
 景気よく仕入れた時の荷が残り 克枝
 どこでも食べる景気が家出さず 幹定
 奥さんがショートカットにした多忙 里風
 熟柿触ればつぶれそうな女 綾子
 忙がしいことを美人札を言い 梁水
 体操で鍛えた身体を持って嫁き 扇水
 うちの子もあぶない嫁を急がねば 柳子
 不景気を見破られてるふところ手 千翁
 和歌山短詩型文字クラブ 中筋三幸報

トランプで子供天国 富子
 トランプに見透かされてる気の弱さ 政夫
 占ったトランプやはり味方せず 次章
 トランプのケチ見逃してと目が笑う 春子
 コンピューター大安の日に使い初め 公作
 ○×の思出がある 暦焼く 五月
 暦だけは嘘をつかない朝が来る 太茂津
 トランプの手品一ツは種を出し 勇次
 トランプなど知らずにすぎた五十年 清治
 留守番の欠伸 暦も読み尽し 葵水

家出したその日のままの暦なり 三幸
 暦見てみくじをひいて手相見て 光治
 暦など信ぜずにて気の弱い 美一
 古い字の多き暦を読みあぐむ 朱三子
 にらめっこしても暦の今日は今日 凡夫
 ○印つけられ暦の過去未来 幸子
 馴れ染めはスベード同士あの夜から 英比古
 トランプの手品で男見直され 城石
 元日やパパさんまじってババぬきし 蘇風
 喧嘩する仲でも 暦吉とあり 三郎
 日めくりは年寄りだけのものになり 京子
 大安で閉ずが出てきて 思案する 松子
 備前川柳社 目賀芳月報

逢う人が違うて髪型の型を変え 清春
 年寄りに見られとうない髪を染め 柳子
 ヒップスタイル原始時代を思わ 一声
 髪染めて気分歳に逆う 秋風
 日本髪ちらほら春の街になり 胡月
 朝鏡夕べのセットもう崩れ 三与子
 バリカンがすくない髪に気をつかい 芳明
 加美の素の広告を見る日のあわれ 正州
 振り返るわが人生に悔いがなし 久米雄
 南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
 クーポンで気随気儘の一人旅 八郎
 クーポン券探す終着駅の灯よ 作二郎
 クーポン券二人になればうれしそう 圭水
 クーポン券家の疲れをいやしに 金三
 クーポンの宿は風呂から海が見え 摩太郎
 伊豆の湯のクーポンそえて祝てくれ 宏子
 クーポン券使い切るまで雨の旅 和郎
 大阪通信病院川柳会 森下愛論報

小池鯉生著

句集「残照」

336

浦和市三室松の木3694 小池鯉生

照

共 八五〇円

梶元紋太序文の一節「……素生の死は否が応でも真実になって終った。……然し私は不思議に胸を張った。なあに負けるものか……私は彼の代りになる人をちゃんと得ていたからだ。それはこの句集の著書小池鯉生君である。……私は素生君に会いたくなれば鯉生君を見ればよいのである。……」

年金の余生は釣りに凝って留守 没食子
立話しながら歩く廻り道 竹莊
半分はお辞儀している立話 草右
立話遠い噂をきいて来る 芳川
道楽の芸が今では身を助け 幸男
小言聞く道楽息子女形 愛論
道楽の包丁自慢が出した店 夏生
まるべに・あすなる合同句会

(大阪市)

川村好郎報

自腹とは知らず悪口言って飲み 青香
一人だけチャホヤしないのが目立ち ゆきを
応庸に自腹をきっている痛さ 素郎
中卒は貴賓の如く迎えられ 瓢太
ゴルフ狂自慢のスコアばかりなり 扇里
病人を笑わせすぎて叱られる 慶之助
寒風へ馬鹿じゃなから振るクラブ 立兒
キャリヤーを自慢が腕を見せたがり 百酒
自分では着られぬ晴着女めき 泉睦
万博の宿を頼むと年賀状 星斗
初詣今年も同じ願をかけ 一世
お正月教育テレビもかけてみる 幸子
初詣帰りの無事を先ず頼み 節子
まだとれぬ銀行仕込みのいんぎんさ 茂兒
課長さん今日は自腹か釣銭も取り 好郎
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報
発奮をしている証 抛歩巾が広い 河産
底突いて脱皮一念まつしぐら 儀一
ライバルを意識十指を握りしめ 鬼遊

七転び八起さえ心の鞭鳴らす 之保
発奮どころか女に養われ 生長
特訓がすぎて発奮してくれず つき子
発奮をしたら運までついてきた 奈々
老骨の発奮ギンギン音を立て 重夫
甘えても泣いても夫の広い胸 史好
甘い言葉さらりと女の城守る 真砂
内職の合間へ甘える子と対話 弥生
手のよこれ具合もばんちやる気出し 双笑
おそかり発奮したが親待たず 双楽
発奮の今朝も電車が又遅れ 草春
発奮の結果按摩に儲けさし 生長
酔っている時だけ発奮する男 虎声
又発奮かどひやかされたる浮き沈き 大庸
発奮が今の貫録つくりあげ 酔々
発奮を誓う心に妻子おく 修史
老夫婦発奮したがたかがしれ 喜風
しもやけの手の大きさを発奮し 痴亭
三面鏡へそと一人で甘えてみ 紫
マスクして発奮の眼のかがやけり 白柳
時々甘えてほしいのが男 好郎
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
床を背に幸運だけでない眼 桂馬
幸運にどちらにも似ぬ器量よし 中野
幸運の蔭の努力は他人知らず 吐来
幸運は誰がつかむか子沢山 伊都恵
金婚式幸運の過去語り合い 中井
幸運をこちら向かせる鈴を振り 一治

注射針次の子供が先に泣き 吸江
現実が思考の甘さ跳ね返し 河股
甘い酒汚職の匂い忘れかけ いわを
甘い汁吸ってたつもりが吸われてた 酔々
甘い口チクロの影を案じさす 森田
人生を甘く見すぎて自己批判 上田
酸い甘い世間の辛さ子に論す 猿女
婚前の甘い言葉どこへやら 加藤
独り者つづくる針で指を突き 友恵
針仕事母も使った象牙ヘラ 久恵
注射針大の男をたじろかせ 垣津
豪雨去って遠くの非害聞いており 悟郎
順境がつづき幸運口にせず 好郎
まるべに・あすなる合同句会

(大阪市)

川村好郎報

酌きながら妻があせりを止めてくれ 素郎
急ぐなら降りとくなはれと運転手 立兒
身をまかせてからは女があせりだし 慶之助
評論家ばかりで決のない会議 泉睦
なんばあせっても平のままだ 瓢太
猫の手も借りたい猫はこたつに居 百酒
目の前を横切り肩を叩かれる ゆきを
横切った車のようにな消えた恋 幸子
ハイミスのおせり縁談遠ざかり 扇里
大臣を呼び捨てにして評論家 青香
評論家気取りの床屋よくしゃべり 茂兒
衆目を知って横切る美人づら 好郎
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

父ちゃんの片腕という嫁きおくれ 天笑
 片腕とみられ組合にマークされ 奈々
 片腕と思えばこそと恩に着せ 生々
 片腕の看護婦へ妻ちよつと妬き 草春
 片腕があつさり身売りする落目 醉々
 片腕にならぬのに賞与ゆすられる 大庸
 休息に片腕さする思いやり 儀一
 片腕にやつと仕込んで引き抜かれ 史好
 片腕を貸しあいスランプきり抜ける 比呂路
 両腕で抱えてみたい半身不随なり 八郎
 片腕となれる頃まで親もてず 之保
 片腕を宙に泳がせ釣我慢 痴亭
 片腕で目さまし止めた朝の床 大吉
 片腕を妻に任せて抜目なし 喜風
 抱きしめたい衝動へ義手が鳴る 修史
 片腕にそっぽ向かれる程に落ち 吐来
 五十やつと課長の椅子にすべり込み 万竿
 やりくりがついて新年へすべり込み 秋水
 すべり込み出社へ信号長すぎる 虎声
 発車ベルまだ来ぬ人が憎らしい 鬼遊
 通訳を片腕にして京の街 白柳

片腕ともじやまものともなり専務 好郎
 川柳ウイロー社（ハワイ）
 正夢であれかし佳人の手の温み 曉舟
 枯木組だが捨てられぬ夢があり 泉水
 妻にさえ話せぬ夢を胸に秘め 万里歩
 夢に見る母はいつでも若い顔 浮草
 まだまだと一旗挙げる夢に生き 蒼蛇樓
 移り行く世相に歩巾追いつけず 峯円
 移り来て漸く芽が出た三代目 紅茶
 駆け落ちの処定めぬ移転先 山
 移り行く世相長生きしたくなり カロ女
 堺・若芽合同川柳会（堺市）和海草春報
 うしろから夜道の咳が追いつける 志寿
 大衆を見下してする咳払い 双楽
 百日もつづくセキかと孫を見る 文成
 押売りを弱気にさせた蔭の咳 痴痴
 あとの語が続かず一寸セキ払い 青柳
 咳払い聞きわけ嫁がすわり替え 白柳
 宛名書くピストンのよう妻の指 耕人
 宛名をばさげばあんなにつき当り 磨天郎
 宛名ではどうやら二号と云うくらゐ 徳子

たよられてたよっています宛名書く 宏子
 宛名から怪まれてる女文字 流月
 年賀状宛名も筆で書く律義 静馬
 たそがれて宛名をさがすアルバイト 狂二
 スタートの子より親があがつた 草春
 千金の夢を背負つた馬の列 柳信
 スタートで足踏みしる気弱者 つき子
 スタートはよかつた咎をいまだ平 欽正
 スタートでもう不渡りをつかまれ 天笑
 スタートの余裕大きく息を吸い 左良
 アリバイを髪一本にくずされる 牛歩
 アリバイは星と野良犬知っている 美代
 寝転んでアリバイ造る電話口 筑前
 アリバイの視角にゆれてゆく妻 夢成
 アリバイはあれど信用しない朝 遊仙
 アリバイを話す口べた坐り替え 千万子
 アリバイを共に作つて飲み仲間 一二三
 富柳会句会（富田林市） 阿部柳太郎
 家伝ですよとおせち料理を自慢する 維久子
 女性上位おせち料理も既製品 白柳
 二人三脚この道もまたたのし 八郎

句会

玉造川柳会（大阪市）
 時 四月十日（金）午後六時
 題 秤・あつさり・特別宿題
 所 玉造交差点南一〇〇米
 大阪信用金庫

堺・若芽合同川柳会
 時 四月十三日 午後六時
 題 「トップ」「とばける」
 所 八木摩天郎居

南海川柳会
 時 四月十六日 午後六時
 題 「欠陥車」「大げさ」
 所 ナンバ高梁下
 親和クラブ

南大阪川柳会
 時 四月二十一日（火）
 題 「想像」「簡素」
 所 アベノ松崎町二丁目
 以和貴荘

榎本健一逝く

花道に泣いて笑わず幕が下り
 たんば道寒さにめけずふきのとう
 木枯も良しこの道に苦を忘れ
 雪道へ点となる児へ母は停ち
 血に濡れた道路へ非情なカメラの瞳
 反骨の後姿が親に似る
 朝帰り後姿は岩のよう
 待っている姿土産の荷が軽い
 姿までよろしおますという大屋
 姿見は人の心を見ぬくもの
 着上手も後姿を人に聞き
 先輩の背番にすまぬ二軍落ち
 背番号ゴールの前の底力
 観衆の期待へ打った脊番号
 こまつ柳壇 山上千太郎報

一杯はまじめな顔で祝い酒
 やはり痛でしたかを聞く悔み
 ガラス玉入れた小箱に夢一ぱい
 納棺へ予想の女あらわれず
 腹一ぱい言うていよいよ気がめいり
 予想通り来る颯風へ釘を足し
 一杯のコップ旧知の中にさせ
 予想屋の世馴れた口のにせられる
 予想から遠くはずれて我をすてる
 お茶一杯出さぬと不満持ち帰えり
 予想とは別に物価がはね上り
 一杯に泣かぬと上戸承知せず
 まどか

凡 吉
 菊 代
 美 代
 笑 痴
 六 竜子
 結 緒
 耕 人
 花 梢
 柳 太
 朝
 吉 太郎
 静 馬
 栄 一郎
 や な ぎ

予想屋をにらんで帰る競馬場
 一杯の屠蘇老妻へ艶そえる
 予想屋に頼った馬券皆はずれ
 ヘリコプター空一ぱいに春の音
 大雪を予想してから雪を待ち
 一杯の酒にほろ酔う俺も齢
 アメリカの波紋予想せぬチクロ
 コーヒの一杯へ若者血が燃える
 場所前の予想に答え勝ち続く
 仕合せが一ぱい初春の句を案じ
 一杯とくぐるのれんに妻の顔
 元旦を一杯ずつで酔う平和
 戦時中誰が予想したろうか米の
 一杯の酒に人生ある如し
 胸に納め切れぬ喜び身にあふれ
 いずも・むらくも

川柳塔まつえ句会 岡崎祥月報

落ち鮎の柚子色づきて瀬を下る
 幸せに胸が高鳴る日の晴着
 スモッグが政治へまねく不信感
 庭の柚子我が家の歴史みなキャッチ
 なけなしを晴着へはたく親心
 政治の貧困土地に泣く人笑う人
 捨てて来た小犬が気になる夜の吹雪
 プライドを持つ青年の眉太し
 肌の香を強く感じた隙間風
 減産の米新しい年きびし
 生れては消える新語が又流行り

み さ
 き み 子
 苔 泉
 と し 樹
 香 径
 生 風
 富 美 子
 た つ 路
 魚 山
 信 子
 清 人
 芳 香
 吉 枝
 茶 仏
 千 太 郎

ふぐちりで冷たき疲れ勞わられ
 プライド捨てて楽しい旅の宿
 来年は建てるよ決めた隙間風
 押売りが素通り犬の面構え
 母の手を借りる晴着のしつけ糸
 泥酔の仕立卸しを汚して来
 感激の乾杯晴着にも吞ませ
 隙間から風は秘密を探りに来
 川柳塔まつえ句会 祥月報

世間出ておしやべりが過ぎ婚期去り
 埃まみれ儲けた金の温み知る
 渡る世間につき回っている運不運
 咳ばらいしめしあわせていた合図
 欠勤の嘘へもっともらしい咳
 注射すむまで咳を耐えてた
 月の埃かぶってアポロ帰って来
 埃っぽいとこに道具屋味があり
 敷居またげば男世間へ体当り
 政治の埃日本は神が吸うばかり
 砂埃蹴って一直線に踏む愛車
 駒つなぎ句会 岸南柳報

舞扇持つ手きびしい寒稽古
 寒空に良き人だからこの我慢
 寒風に振りまわされてフグ提灯
 寒稽古早起きとなりよるこばれ
 留置場の寒さを看守知らぬふり
 たまたまの暇を売つ子もてあまし
 ひっそりと咲いて寒梅実を残し

孤 呂 二
 鶴 丸
 通 児
 代 仕 男
 紫 吻
 独 仙
 緑 之 助
 祥 月
 一 夫
 巡 歩
 雪 美
 澄 水
 千 代
 孤 呂 二
 鶴 丸
 通 児
 晃 男
 天 痴 人
 祥 月
 秀 代
 市 子
 点 心 坊
 ひ と し
 河 太 郎
 潔
 柳 信

饅餅が屈いて里の母達者 宏子
襟巻の狐の顔も寒そうな 育園
寒稽古白毛元氣な声を出し 悟郎
寒稽古親子で汗の良い家庭 規一郎
寒の入り隣りも派手な餅をつき 南柳
一団の若人寒を突きぬける はやを
寒がりの厚着を医者に叱られる 小路
北風を突き祖母になる足早め みよ
丸文協和川柳会 藤井春日報

飼主にどこか似ている犬の顔 城戸
番犬を飼育していて賊となり 玉仙
才走る意識が仇の佗び住い 芳仙
野次馬は消防車よりも先走り 健山
過疎の村赤字を負うてバス走 素身郎
お目出度と医者に云われて苦笑い 黒山
ねだる孫口で叱って目で笑い 黙生
激浪にたえた小じわが笑顔めき 翁童
苦を見せぬ呵々大笑にある威厳 春日
大年と云ったばかりに年がばれ 吉岡
にわか雨月賦の服が走っている 頑念
川柳まばたき 出原敬一報

新聞の片隅で知る友の事故 望
色あせたニュース読ませる大掃除 康明
脱線があるから授業好きになり 敬一
縄の汽車脱線場所柿の下 初美
脱線の証掘裸でおどつて 翠雲
脱線も適度にまぜてとる教鞭 凡人
脱線の記憶をたどる朝の悔い 康明

脱線の言いわけ友を連れてくる 清子
脱線を妻よりきつう娘がなじり 草加
若さまだあるから脱線してしまい 文子
脱線へ合わす老妓の撥捌き 草加
鉦口よ市民を泣かす血を流せ 敬一
秋晴れを飛行機雲が裁ってゆき 望
兄ちゃんが小さい方を取り平和 海山
人様は買わぬが天狗の顔はよい 夢春
城北朗句会 川口弘生報

珍客へ打つ相槌の大きすぎ 春果
珍客を酔わしておいてうるさがり 進
珍客にファミリー・サービス延期 弘生
何をしに来たかと珍客怪しまれ 満津子
同窓会の名簿片手にたかりに来 濁水
座布団でお昼寝してる孫の客 志津
珍客にあわてる寢床の日曜日 富士
珍客と互に見合わす顔の皺 繁子
珍客が来たので飲めぬ酒ものみ 茶々坊
珍客へ月給前の妻慌て 三十四
珍客は昔お世話になった人 生仏
小銭をば三番街の川になげ 秀村
倅は良い誘惑が付きまとい 多幸
丸裸モデル斜に腰をかけ 隼人
プラモデル孫に組まず祖父が組み 賛平
酔っぱらい近所まで来て身づくろい 風仙洞
川口弘生報

大道商人孫ばけ見逃さず 三十四
値につられさわつてみたいセコの靴 小路
明朗句会

信用はせねど手の出る山師の品 三平
何を売るかわからぬうちは人だかり 満津子
タコヤキ屋手すきに背の子をあやし 弘生
ステッキで客を集める山師の術 生仏
何を売る山師円陣に客を寄せ 濁水
だますのにサクラが先に金を出し 進
大道の賭事サクラの目が光り 一休
無い袖をふり合っている大晦日 志津
ボスが来て儲けもないに場代はね 隼人
辻占が希望持たないに年始め 多幸
山師だと知つていながら買つて来る 繁子
着物着て正月らしくご挨拶 秀村
新妻が来てから仕事早仕舞 一登
園児らに早や結婚の積立金 富士
亡き母の笑顔が止めた出来心 雅行
白壁にふと落書をしてしまい 有万
待従医か老いたキリンの脉をとり 為二

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-14
夜間 06 4400 八

本社四月句会

日時 四月六日(月) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

柳 望遠鏡 「パジャマ」 「新艶語」
三題(題と選者は当日発表) 各題三句
席題 八木村好郎
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区饅谷仲之町20

川 柳 塔 社

5月の兼題 「ケチ」 「満員」
「切り札」 「話好き」

秀句鑑賞と梅志句集 送料とも 550円

・ 募 集 ・

六月号発表(4月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

近作柳樽(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「ウインク」 中村 ゆきを 選

「平凡」 岡村 久志良 選

「欲」 岩本 雀踊子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

近作柳樽(10句) 北川 春巢 選

九輪抄(3句) 清水 白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「求人難」 中筋 三幸 選

「スピード」 辻 白溪子 選

「逆境」 西 いわを 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

主催 大阪読売新聞社

3月20日→5月10日

- 日本いけ花芸術協会の後援を受けて花やかに開く伝統美の祭典!
- 第1会場〈華道展〉では、日本の代表的な36流派から出版!
- 各時代の風俗・芸能を背景に、いけ花の歴史を分かりやすく解説
- 逸翁美術館秘蔵の茶器300点を初公開する〈茶道展〉も併催
- 入園料…180円 こども90円

宝塚ファミリーランド

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千 百 円(送料共)

一年分 二千百六十円(送料負担)

昭和四十五年三月二十五日印刷

昭和四十五年四月一日発行

大阪市南区饅谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五五二一

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

肝機能の保護と改善に！

グルタチオン製剤



グルタイド® 注射用

高純度のグルタチオンであるグルタイドがエネルギー代謝、諸酵素賦活、解毒など優れた作用を発揮します。

- 【臨床応用】
- 各種肝疾患、術前・後の肝機能障害
 - 妊娠中毒症、自家中毒、小児消化不良症の予防と治療
 - 各種アレルギー性疾患（湿疹、蕁麻疹など）
 - 放射線障害の予防
 - 角膜炎および白内障の予防と治療
 - 糖尿病時の糖代謝の改善



田辺製薬株式会社
大阪市東区道修町3丁目21番地

剤 型	包 装	健保薬価
100mg	10管、50管、100管（溶解液2ml 添付）	1管 ¥240.00
200mg	10管、50管（溶解液4ml 添付）	1管 ¥470.00

R59G2

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

大阪・京都・奈良・名古屋から 鳥羽・賢島へ近鉄特急直通

海女と真珠のふるさと
伊勢志摩国立公園へ
近鉄特急が いっそう
速く便利になりました
大阪・京都・奈良・名
古屋から楽しい海洋遊
園鳥羽へ美しい多島海
あご湾・賢島へ 乗り
かえなしてひといきに
ご案内します



◆近鉄特急券のお求めは、鐵 本ソ
ーリスト・日本交通公社・日本旅行
の各営業所へ

近鉄



一番よい酒
うまい酒



清
酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影